

卒業旅行に来たら異世界に召喚されました

岸雨 三月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都会への卒業旅行に来ていたチノは、ゲームセンターでVRゲーム「ラビットクロニクル」で遊んだ夜、突然異世界へと召喚されてしまう。そこは何とゲームにそっくりなファンタジー世界だった。冒険者学校の同級生マヤとメグも巻き込んで、チマメ隊の大冒険が始まる。

※ごちうさのエイプリルフル異世界の一つ、チマメクロニクルの世界を舞台にしたファンタジー小説です。

【★注意★】

この小説にはごちうさ原作単行本8巻のネタバレが含まれています。TVアニメ3期で描かれるであろう範囲よりもさらに先の時点の物語です。また、OVA「Sing For You」のネタバレ……というより見ていないと意味が理解できない要素が物語の核心に用いられています。十分注意して読み始めていただくようお願いいたします。

なお、この小説は2019.9.8のこみつくとレジャー等でサークル「Fragile Rain」にて頒布した同名の同人誌と同内容です。おかげさまで紙の本が完売し、少し時間が経ちましたので、ハーメルンにも掲載させていただくものです。

←同人誌版の表紙絵です。めちやくちや可愛いチノちゃんを描い

ていただきました。どうか見て行ってください！（ひまりス先生作）

目次

プロローグ

1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	①	5
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	②	8
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	③	10
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	④	12
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	⑤	14
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	⑥	17
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	⑦	19
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	⑧	22
1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル	⑨	25
2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは99	①	28
2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは99	②	30
2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは99	③	33
2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは99	④	36
3章：私が私を見つめました	①	41
3章：私が私を見つめました	②	44
3章：私が私を見つめました	③	47
3章：私が私を見つめました	④	50
3章：私が私を見つめました	⑤	52
3章：私が私を見つめました	⑥	56

3章：私が私を見つめました	⑦	59
3章：私が私を見つめました	⑧	62
3章：私が私を見つめました	⑨	65
3章：私が私を見つめました	⑩	68
3章：私が私を見つめました	⑪	71
4章：魔王城攻略完了（みっしょんこんぷりーと）	①	74
4章：魔王城攻略完了（みっしょんこんぷりーと）	②	77
4章：魔王城攻略完了（みっしょんこんぷりーと）	③	80
4章：魔王城攻略完了（みっしょんこんぷりーと）	④	83
エピソード		86

プロローグ

「ゲームセンター楽しかったなー！ やっぱ都会は違うわー、一度コアと一緒に行った木組みの街のゲーセンはすごーく古い機種しかなかったけど、こつちだと最新機種なんでも揃ってるし」

「VRというのは初体験でしたが、本当にゲームの世界に入り込んだような気分になりますね。凄いです」

「双子のナツメちゃん、エルちゃんにもまた会えたいし、楽しい一日だったね」

チノ達が都会への卒業旅行中のある日のこと。ゲームセンターを存分に楽しんだチマメ隊の3人は、ホテルに戻ってきてても未だ興奮冷めやらぬ様子で昼間の出来事について話していた。専用のヘッドセットを付けて仮想空間を冒険するタイプのVR RPG「ラビットクロニクルVR」が三人の特にお気に入りだったようで、旅行先で出会った双子の姉妹——ナツメとエルが乱入してきた協力プレイすることになったことも含めて、三人にとってはワクワクする経験になったようだ。

チノ達の泊まるホテル「ロイヤル・キャッツ」はナツメには「ゴーストホテル」などと言われてしまったオンボロだが良いところもあった。他の宿泊客がおらず貸切状態なので、こうやって共用のカフェテリアスペースで夜まで騒いでいても怒られる心配や人目を気にしたりする必要が全然ないのだ。なので、ちようど今日のように気分が高揚して部屋に戻っている気になれないときなどは、一階に下りてきてみんなでお喋りするのが日常になっていた。今の時刻は夜の22時過ぎ。他のホテルだったら、いくら建物の中とはいえ10代の女の子達だけで盛り上がっているのは少しはばかられただろう。

ただ、チマメ隊の輪よりちよつと離れたところに一人ぽつんと座っている人物——コアは、(彼女にしては珍しいことに)テンションが高いという訳ではなさそうだった。

「うう、VRゲーム私もやりたかったな……、結局アバター作っただけで終わっちゃった……」

ココアはそうぼつりとつぶやいた。

ゲームセンターでは、ココア、リゼ、シャロ、千夜の年上組もアバターを作ってゲームをプレイし始めたのだが、千夜が3D酔いで離脱したのを皮切りに年上組はすぐにログアウトしてしまい、結局まともなゲームの中身はプレイしていないのだった。

「いや、千夜にはシャロとリゼがついてくれてたんだから、普通にあのアバターと一緒にクエスト来れば良かったじゃん……」

「この格好、年下みたいで恥ずかしくなってきた」とか言って自分からログアウトしたのはココアさんです」

「ま、まあ、まだ旅行も日にちあるし、今度またみんなでゲームセンター行ったときにプレイしようよ。あの『ラビットクロニクルVR』でゲーム、調べたらまだ続きがあるんだってー。一度クリアすると、最終ステージの先に隠し要素が出現して、伝説のまおう？が復活するクエストが遊べるとか……。だから、私たちもまだ続きを遊びたいし」

総ツツコミを入れるチノとマヤに対し、メグは慰めを口にしたが、実際のところまたみんなゲームセンターに行く機会があるかどうか怪しいのは四人とも薄々分かっていた。高層ビルから眺める宝石箱のような夜景や、回るだけで一日かかるような大遊園地。都会ではまだまだ見たいもの、やりたいことがたくさんあるのだ。長いと思っていた旅行だが、いざ始まると一日一日が楽しすぎてあつという間に過ぎていき、今では残された時間が惜しいと思うようになっていた。果たしてゲームに興じるだけの時間はまだ残されているのだろうか。場の空気がやや沈んでしまったのを見かねて、マヤが話題を変え

る。
「そういえばリゼ達はどこに行ってるんだ？　まさかもう寝ちゃったの？」

「確か『今日は流星群が見える日だから』と言って、ホテルの望遠鏡を借りて屋上に出て星を見てるんじゃないかなー」

「意外と何でもあるなこのホテル……。でも星を見るんだったらどう考えても木組みの街の方が向いてるよなー。だって都会の夜は明る

すぎるもの」

「だねー。一番向いてるのはたぶんココアちゃんの実家だね」

「いつかココアの故郷にも行つて思いつきり天体観測したいなー。キャンプもまた出来そうだし」

マヤとメグがそんな他愛無い話をしている横で、チノが「ふわあ……」とあくびをした。流石にちよつと長旅の疲れが出てきているのかもしれない。それを見たメグがこう切り出した。

「明日も早いし、そろそろ部屋に戻ろうか」

四人が上階に向かつて移動する途中、窓から外の景色を見てみたが、この時間でもナツメ・エル姉妹の泊まる隣の豪華なホテルや他の建物の窓からいくつも明かりが漏れており、やはり星はあまり見えそうになかった。

「ココアちゃん、流れ星見えないかもしれないけど一応お願いしておいたら？ みんなで魔王が倒せますように、って」

「魔王討伐を星に祈るとか、ここはファンタジー世界かよ」

マヤが思わず苦笑する。

チノ達がホテル「ロイヤル・キャッツ」で取った部屋は二人部屋が四つだ。七人連れのチノ一行はどうしても一人余る計算になるので、毎日くじ引きで部屋割りを変えることにしていた。今日の部屋割りには、チノとココア、千夜とシャロ、マヤとメグが同室でリゼが一人部屋だったので、チノは廊下でマヤとメグとは別れることになった。お互いにおやすみ、と挨拶を交し合う。

ゲームのことをまだ引きずっているのか口数少ないココアと一緒に部屋に入る。この部屋のドアは建て付けが悪くコツを掴まないとうまく開かないのだが、流石に一週間近くも泊まっているのでチノは慣れた手つきでドアを開けた。

部屋に入ると安心したのか急激にチノは眠気に襲われた。自分で思うよりも長旅の疲れが体に溜まっていたのかもしれない。お風呂に入つて、歯磨きもして、着替えもしていたのですぐに寝れるのが幸いです——、そんなことを考えながらチノはベッドに潜り込んだ。それにしても、頭の芯から麻痺するようなこの眠気は異常だ。うっかり

深夜までボトルシップ作りに熱中してしまった日の翌朝でも、ここまでの眠たさを感じたことがない。これはまるで、誰かが強制的にチノの意識を飛ばそうとしているかのような――？ 何か奇妙なことが自分の体に起こっているのを感じながらも、チノは辛うじてココアに一言「むにゃ……おやすみなさい」とだけ言うと、ほとんど間を置かず眠りに落ちていった。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―①

「……ノちゃん！ チノちゃん！ 起きて！」

「んう、すう……」

「チノちゃん、起きてっばー！」

ココアの声でチノは目を覚ます。

チノはココアと一緒に生活するようになってもう二年にもなるが、いつもチノがココアを起こす側で、ココアの方が先に起きていたというの記憶に無い。ココアさんが私に起こされなくても起きる時間になっているということはもしかして、物凄く遅くまで爆睡してしまっただけでは——？ 急がないとラビットハウスの開店時間に遅れちゃう、いや違った今は卒業旅行に来ているんだって、早く起きないとせつかくの旅行がもつたいたいです——、そんなことを考えながら飛び起きたチノの目に入ってきたのは、脳の処理能力を超えるような予想外の光景だった。

森の中だ。森の中にいる。えっ、森の中？

私はホテル「ロイヤル・キャッツ」のベッドの中で寝たんだってのは？

さらにチノを戸惑わせたのが、自分自身の服装だ。

ホテル備え付けのナイトガウンとキャップを付けていたはずなのが、今着ているのは白と青、わずかな金色を基調にしたデザインの、うさ耳パーカー——ではない。これはローブだ。ローブを着ている。素材は羊毛だろうか。ただし、中世ヨーロッパで着られていたもののような足元までの長さはなく、下には短めのスカートを履いていて、健康的な太ももがあらわになっていた。

そしてチノの手に握られているのは、同じく白と青と金色を基調にした意匠の長い棒状の物体。これは杖だ。杖を握っている。

チノは今度は自分のいる場所を確認してみた。地面から感じるのは柔らかな下草の感触だ。よくよく見ると、チノの座っているところを中心に、青色に光る円形の幾何学的な模様——これは魔法陣と表現するしかないのではないかと、が描かれていた。周りを見回す

と、森の中でここだけぽっかりと円状に木が生えていない小さな広場のようなスペースのど真ん中にいるようだ。真上から太陽の光がここにだけ差し込んでいるのが神々しい感じがして、何かの儀式にでも使われそうな印象を持つ。

ローブ、杖、魔法陣——とここまで来てチノは思った。これではまるで、剣と魔法のファンタジーの世界みたいです、と。ちょうど、昨日遊んでいた「ラビットクロニクル」の世界観のような——、そう考えた時、再び声が出てチノの思考は中断された。

「チノちゃん！ やつと起きたね！ あんまり目を覚まさないから召喚時に事故があったのかと思ってヒヤヒヤしたよ〜」

ココアさんの声だ。いったいどこから？ 声のする方に首を動かすと、大きな石に「しめ縄」が飾られていて、神社で見たことのある「御神体」のようなものが鎮座しているのに気付いた。

(ここまで身の回りのものは西洋ファンタジー風だったのに、突然和風のものが混ざるのは何ともシュールな感じだ。しかもココアさんの声で喋る石なんて)

そんなことを考えているとさらに声が出た。

「そっちじゃないよ！ 上から来るよ、気をつけて！」

上？ 見上げると「御神体」の3メートルほど上あたりに、確かにココアがいた。なんと、どういう原理なのか全く分からないが空中に浮遊している。それだけではなく、服ももし木組みの街で着たら間違いないくらい周りに「浮く」ような衣装を着ている。

「女神様……のコスプレ？」

「そこは女神様って言い切って!?!」

ココアは、ギリシャ神話に出てくる女神が着ているような純白のキトン——上下が一つ繋ぎで腰のあたりを金のベルトで止めている亜麻布——を着ていた。さらに天使のような羽根を背中から生やし、黄金のティアラを頭につけていて、格好だけは西洋画の中に登場する女神そのものだった。だが、本当の女神だったらそれに見合う威厳とかカリスマとかオーラみたいなものを漂わせているのではないかと思うが(チノはもちろん本物の女神に会ったことはなかったが、たぶん

そうなのだろうと思う)、この女神姿ココアには全くそういうものが無く、いつものココアと同じようなオーラなので、逆に立派な衣装に着られているような、中身が伴わないコスプレのような印象をチノは受けたのだった。ココアの体型だと胸のところの布の横からチラチラと二つの膨らみが見出してしまい、不必要にセクシーな印象を与えることがよりコスプレっぽさを加速させていた。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル②

ココアはチノと同じ高さまでふわふわしながら下りてくると、わざとらしい口調でこう言った。

「えー、こほん！ チノちゃん……いや、伝説の大魔法使いの血を引くソーサラー・チノ、私、女神ココアはあなたをこの世界に召喚しました。あなたはこの世界を危機に陥れている魔王を倒し、世界に平和をもたらさなければなりません」

「はあ……」

チノは自分のほっぺを思いつきりぎゅーとつねってみた。痛い。

朝起きたら見知らぬ土地に居て、魔法使い風な衣装を着せられて、空中に浮くココアさんというあり得ないものを見せられているというこの状況。夢か、もしくは「ラビットクロニクルVR」のヘッドセットを寝ている間にこっさり付けさせられたのかと思った。自分が今着させられている服は、よく見ると昨日遊んだ「ラビットクロニクル」で着ていた装備そのものなので、最初はVR世界なのだと推測した。だが、自分が今座っているこの場所からは間違はなく森の中特有の野草の匂いがする。VRは匂いの情報までは再現しないので、ここはVR世界の中ではないのだろう。そうすると、残る可能性は夢だ。今頬をつねると痛かった気がするが、きつと痛さを感じるタイプの夢なのだ。たぶん。

「いやいや、ここは夢の中じゃないよ!? この空間には無数の世界線があるという説で、その那由多のごとく大量の世界は、それぞれが酵母菌ほどの小さい違いを持ちながら、可能性と結果、光と時の格子展開の中で無限に広がり、その中にはまた世界がいつぱいあって、粒子が量子トンネルをくぐり抜けるかのように世界線の間の壁を通り抜けることが可能な瞬間があり、……って、理論的な部分の詳しい解説はまた後でにするけどとにかく！ チノ、あなたは間違いなく、元の世界とは違う異世界に召喚されたのです！ でも大丈夫！ 魔王を倒せば元の世界に元の状態で帰れるから！」

世界線、量子、酵母菌——？ ココアの口からこの世界の世界観に

そぐわないような単語が次々とまくし立てられたのでチノは驚く。異世界、なんて簡単に信じられる話ではなかったが、夢にしてはリアル過ぎ、VRでもないこの世界のことを説明できる言葉をチノは持ち合わせていないのは確かだった。いったん、ココアさんの言うことが正しいという前提で話を進めるしかないかもしれないかもしれません——、そう考えながら答えた。

「仮に異世界というのが本当だとしても、魔王を倒せと言われてもいったいどうしたら……、私は何も戦ったりすることはできませんが。どうせ呼ぶのだったら、リゼさんのように元の世界でも体を動かして慣れてる人の方が良かったのでは」

「だってリゼちゃんも既にこっちの側で……、っつていや何でもない！ チノちゃ……チノを召喚したのは、ほらあれだよ！ 素質？ ポテンシャル？ 的なやつがあるから！ 絶対、魔王を倒せるって！ 召喚モノでおなじみのチートスキルも付与しておいたし、属性の方もちよいちよいつとアレをアレしておいたから！ それに、魔王を倒せるようになるのに必要なスキルの育て方、旅の進め方は、このココアお姉ちゃ……女神ココアが、ばっちりサポートします！ いわばゲームでいうところのチュートリアルみたいなものだね！ 女神様に、まっかせなさい！」

ココアはそう言うと、腕を曲げて力こぶを作るようないつものポーズを取った。しかし女神オーラが全く出ていないので、安心して頼りに出来るとはとても言えなかった。でも——

（やれやれ、ここが夢の世界なのか、本当に異世界なのか分かりませんが、ココアさんはどんな世界でもやっぱりココアさんです）

そう思うと、見知らぬ世界に一人で来てしまった不安が不思議と紛れるような気分になるチノだった。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―③

ココアからチノに提示された「チュートリアル」第一段階の指示は、とても簡単なものだった。

「魔王討伐の旅の第一歩は、まずは仲間探しからだよ！　ここから南にちよつと歩くと街区に戻るから、町外れの『冒険者のカフェ』を目指してね！　そこには志を同じくする仲間が二人いるはずだから、見つけた仲間と一緒にここに戻ってくることに！　それが出来たら次の指示を出します！　注意しないといけないのは、街区に戻るまでの間はモンスターが出現して危ないから、一人では戦わずに逃げるようにね！」

正直チノはほつとした。もしもいきなりモンスターと戦え、なんて指示が出されたらどうしようかと思っていたからだ。二人の仲間、というのがどんな人なのか分からないが、人間相手だったらモンスターとやらを相手にするよりはよっぽど楽だろう。

チノが目覚めた広場は森の中でも意外と浅いところにあつたらしく、ほんの少し歩くと街道に戻ることができた。そこからはモンスターに気をつけながら道なりに歩いたが、実際にモンスターが出てくることはなく、あつさりと街区まで辿り着けてしまった。街は城壁で囲まれていて入り口の門には衛兵が立っていた。チノにとつてはこちらの世界に来て（自称女神のココア以外に）初めて会う人間だったので、衛兵のことをまじまじと見てしまった。いかにも中世というテイストの、細長い槍と丈夫そうな鎧を装備した男の人だった。チノは門を通るとき止められるのではないかとビクビクしたが、衛兵はチノの顔を見ると無言で頷き、特に何も言われること無く通過することができた。

街に入るとココアの指示通り町外れにある「冒険者のカフェ」とやらを目指す。よくRPGでは仲間を探したりクエストを請け負ったりできる「冒険者の酒場」という施設が出てくるが、そのようなものだろうか。チノは街の地図を見たり、住人に道を聞いたりしながら

「冒険者のカフェ」に辿り着いたが——、「冒険者のカフェ」の建物を
見た時、思わずチノは口をぽかんとさせてしまった。

「ラ、ラビットハウス……？？」

そう、「冒険者のカフェ」の外観は、元の世界のラビットハウスその
ものだった。元々、ラビットハウスをはじめとした木組みの街の建物は
意図的に中世ヨーロッパの街並み風に作られているだけあって、こ
の世界の街並みにもすっかり馴染んでしまっている。だが、全く見知
らぬ世界の片隅に突然自分の実家が出現するというのは、何とも変な
気分だ。さて、この家は見かけこそラビットハウスそのものだが、果
たして「中身」はどうだろうか——？ ドキドキしながら、見慣れた
ドアを押し開けて家の中に入る。

「おーっす、遅いよチノー！ 卒業試験に遅れちゃうー！ 今日は大
事な試験なんだから、あんまりのんびりしないでくれよなー」

「チノちゃんおかえりなさい。どこまで行ってたのー？」

「お帰り、チノ」

中に入ると、聞き慣れた二人の少女の声と一人の男の声が出迎える。
チノはちよつとほつとしたような気分になった。二人の方は、昨日
ゲームセンターでも一緒に遊んだ二人——マヤとメグだ。一人の
方は、チノの父親であるタカヒロだ。マヤとメグはテーブルに座って
いるからお客さんなのだろうが、タカヒロはカウンターの中にいるの
を見ると、この世界でもこの店の主人であるらしい。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―④

「マ、……マヤさん……。メ、メグさん……。こ、こんにちは……。あ、あの、卒業試験で……？」

チノは出迎えたマヤ・メグの格好に面食らって上ずった声で上の空な反応を返してしまった。自分が「ラビットクロニクル」のアバターと同じ姿で召喚されている時点で、マヤとメグもそうなのではないかと予想できたが、いざ実際に目にするのと衝撃的だ。

まずマヤだが、頭には白い帽子に金のゴーグル、うさぎのぬいぐるみと一体化した巨大サイズの髪飾りをつけており、これだけでも物凄く目立ちそうだ。さらに凄いのは服装で、下はショートパンツだが上はベア・ミドリフと言うのだろうか。丈が胸までしかなく袖もない、マヤの健康的なおへそと腋が完全に露出するような、白と青を基調にした服を着ている。傍らに置かれているのは銃のようだが、元の世界でリゼが持っていたような黒色のものではなく、金色でスチームパンツにでも出てきそうな凝ったデザイン銃だ。

対するメグの格好も中々だ。頭からピンク色のうさぎ耳を生やしているが、メグの呼吸に合わせて揺れ動いているのを見るとカチュウシヤを付けているのではなく「自前」のようだ。服装も下はスカート、上はもこもこした毛皮が付いているが丈はマヤのものと同じくらい短いトップスで、お腹が完全に見えてしまっている。うさぎ耳と毛皮からはもこもこした印象を受けるが、一方で手足には金属製の硬そうなガントレットとレッグガードをつけており、さらには大の男でも扱いに困るような大きな斧を持っているので、全体のコーディネートとしては絶妙なアンバランスさを醸し出していた。

二人ともおへそ丸出しの格好で恥ずかしくないのでしょうか——そう思ってしまったが、冷静に考えるとミニスカートで太ももが大きく出ている自分の格好も中々に恥ずかしい。今思うとココアの格好をコスプレ等と言えたものではなかったように思う。一方タカヒロは素朴なチュニツクのような目立たない服を着ていたので、自分の父親の前でコスプレを披露しているような気恥ずかしい気分になって

しまったが、誰も気にする様子がないので気にしないよう努力することにした。

「どうしたのさチノ、そんなに私達の格好をまじまじ見て……。どこかおかしいか？ 何もなければ早く出発しようよ」

「そうだねー、流石にちよつとは余裕持って試験会場に着いておきたいし」

そう言うと、今ラビットハウスに来たばかりだというのに、マヤとメグの二人はチノの背中を押すようにしてラビットハウスの外に出させようとする。「卒業試験」とやらの時間が迫っているらしく、有無を言わせない感じだ。

「つて、ちよつちよつちよつ、待ってください、私この世界に来たばかりでまだ何も」

「はいはい、おしゃべりは会場に向かいながらでも出来るからさー」

「チノ、頑張っておいで。ここまで学んできたことを出し切れれば、必ずクリアできるはずだよ」

最終的には父にまで言葉で背中を押され、訳が分からないままにラビットハウスを後にすることになってしまったのだった。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―⑤

「卒業試験」の会場に半ば強制的に連れて行かれる道中、マヤとメグと色々話をして、ようやくおぼろげながらもこのシチュエーションや様々な物事の輪郭が見えてきた。話から得られた情報、そこからチノが推測した情報をまとめるとこういうことになる。

・チノ、マヤ、メグは「冒険者学校」の生徒をしている。三人はパーティを組んでいつも一緒に行動している仲良しトリオだった。

・今日は「冒険者学校」の卒業試験の日だ。卒業試験では、生徒同士でパーティを組んでクエストに挑戦しクリアするのが課題となる。三人はここでもまた一緒にパーティを組む約束だった。

・三人は今朝最後の復習をするためにラビットハウスに集まっていたが、チノが「ちよつと用事がありますので」と言つて席を外してしまい、中々戻つてこないの、残された二人はやきもきしていた。そしてようやく戻つてきた……というのが、先ほどチノがラビットハウスに来たときの状況である。(つまり、この世界ではチノが召喚される以前に別の「チノ」が存在していたことになる。もう一人の「チノ」は、いったいどこに消えてしまったのだろうか?)

・マヤとメグは、この世界に召喚されてきたという訳ではない。生まれた時から今までのこの世界での記憶を持っている。

・リゼ、千夜、シャロと言つた名前にはマヤ、メグは心当たりはない。ラビットハウスにはバイトはおらず、ほとんど父一人で切り盛りしているのだという。

そしてチノの方からは、自分がこの世界の人間ではないこと、つい先ほど女神ココアと名乗る存在に召喚されたばかりであることなどを包み隠さず二人に話したのだが、それに対する反応は――

「うーんチノ、だいぶ重度の幻覚魔法にかかったみたいだなー。森で大きいこ狩りでもしてた? やつらの使う胞子には幻覚効果があるっていうからなー」

「げ、幻覚じゃないです! 現に私、この世界のことや、魔法の使い方なんかも何も知らないですし」

「まあ高度の幻覚魔法は忘却効果もあるからね。しっかし運が悪いなー、よりによってテスト前に幻覚魔法にかかっちゃうとはね」

「ち、違います！　だから、ココアさ……女神ココアに召喚されて……」

「そんなこと言われても女神ココアなんて名前、神話学の授業の中でも全然聞いたことないしなー。あつ、そいつ女神の名を騙る悪霊なんじゃない？　悪霊にかけられた幻覚魔法だとすると、こりゃ試験始まるまでには解けないかも」

「……ことは違う世界……教会の塔よりも高い『びる』が立ち並ぶ大都会、馬よりも速く走る『でんしゃ』、魔法なしで『かがく』で火も起こせる世界……チノちゃんの想像力は本当に凄いねー、もし卒業試験落つこちでも吟遊詩人としてやっていけそう！」

「おいこらメグー！　縁起でもないこと言うなよー！　メグこそ幻覚魔法にかかって、試験中にこの前みたく周りを火の海にしたりしないでくれよー！」

「はわわ、流石に二度もそんなことしないよー！」

談笑するマヤとメグだったが、チノは自分の言うことを全然信じてもらえないという予想外の事態に慌てた。ココアの指示は「二人の間を自分のところに連れて来い」というものだったので、せめてチノの目覚めた森の広場まで一緒に来てくれないかと頼み込むも、「はいはい、そういうのはとりあえず試験終わってからね？　試験終わっても幻覚解けてなかったらその時は付き合っただけだからさー」と軽くあしらわれてしまった。

マヤとメグをどう説得するか、考えめぐねているうちについて試験会場に到着してしまった。そこはチノが最初に目覚めた場所からさほど遠くないところにあるテントだった。パーティーごとに決められた時間にこのテントに集合すると、冒険者学校の先生からクエストの書いた紙を渡されるので、書かれている課題を制限時間以内にクリアする——というのが卒業試験の流れらしい。

チノ、マヤ、メグのパーティーからはマヤが代表してクエストの紙を受け取った。羊皮紙らしき素材のその紙には、「北の『ティーテーブル

の山』に行き、大うさぎを退治すること。期限は明後日の18時」と書かれてあった。

「ティーテーブルの山か……、そこそこ険しい山だし道中にモンスターも多いな……、今からすぐ出発しても明後日の18時に間に合うかどうか」

「いったん街に戻って山越えとキャンプ装備を整えてからの方がかえって早いんじゃないかな。ちゃんとした準備なしには難しいクエストだと思うよ」

結局、ココアのチュートリアルの次を受ける時間も無く、卒業試験に挑まなければならないことになってしまった。——成り行きでこんなことになってしまいました。この世界に関する知識もない、モンスターの倒し方も分からない、魔法も使えないのに、卒業試験をクリアすることなんて出来るんでしょうか——、チノの不安は深まるばかりだった。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チユートリアル―⑥

「いやあ、大うさぎは強敵でしたね……」

「攻撃パターンが読めなくて苦戦したけど、チノちゃんの補助魔法がうまく入ってくれたのが効いたね〜」

「チノの幻覚魔法が解けないままボス戦に突入とか、いったいどうなるかと思っただけど、案外何とかなるもんだなー」

「だから私のこれは幻覚では……」

「チノちゃん、『あっちの世界ではモンスター狩りなんてしたことないから戦い方なんか分からないです』って言う割には、チームワーク抜群だったよね。もしかして『あっちの世界』でもどこかで一緒に戦ったことあった?」

二日後。割とあっさり三人は大うさぎを倒すことができ、チノの懸念は空振りに終わっていた。

魔法など使ったことの無いチノだが、マヤとメグから少し教えてもらうと、案外簡単に使えるようになった(マヤに言わせると「元々体で覚えていた魔法の使い方を思い出してるだけなんだから、簡単に使えるようになるのは当たり前」とのことだが)。

「ラビットクロニクル」で対モンスター戦のイメトレをしていたのも良かったのかもしれない。二日間の旅で、チノの戦闘スキルはみるみるうちに上達しており、マヤ・メグと一緒に戦うにもさほど支障ないレベルになっていた。

今はティーテーブルの山を下り、出発場所のテントに戻る途上である。マヤの持つずた袋の中には大うさぎ戦の戦利品である巨大ニンジンが入っている。このニンジンはずか野生で生えているのを目撃されたことがなく、大うさぎの巣穴にのみ存在が確認されているので、クエスト達成の証拠として試験官に提出することになっているのだった。あとはこれを無事持ち帰りさえすれば試験合格だ。マヤは袋を左右に揺らしながら弾むように森の中の小道を駆け下りていく。

「ねえねえ、学校を卒業したら何がしたい? これでクエストも自分達だけで受注できるようになるし、街同士を自由に移動することも出

来るようになるし、クラスチェンジもしようと思えば出来るようになるし……、夢が広がるなー」

「私はペットモンスターを飼ってみたいかなあ。学校卒業して一人前の冒険者になれば、魔物使い協会への登録も出来るようになるよね」

マヤとメグは楽しそうに将来の計画についてあれこれと話している。しかしその時、チノの耳はこの森の中にこだまするかすかな違和感を聞き取っていた。

「あ、あのえつと……マヤさんメグさん、お話中すみません。でも、何か今聞こえませんでしたか？」

「なんだチノどうした!?! 今度は幻聴か?」

「幻聴じゃないです! 耳をすませてみてください、遠くから何か聞こえてきませんか?」

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―⑦

チノの言うとおりに確かに、「ドゥウン……ドゥウン……」という重低音が、マヤとメグの耳にも聞こえ始めていた。地鳴りだろうか？ 事態に気付いたマヤは慌て始める。

「な、なんだこの音!? …… どんどんこっちに近づいてきてないか?」

間違いなく幻聴や気のせいなどではない。「ドゥウン……ドゥウン……」という音は、急速にチノ達に近づきつつあった。しかも音に合わせて地面の揺れまで感じる。周りが森なので視界が悪く発生源を特定できないが、これはまるで、大型の生物がこちらに近づいてくる時の足音のような――

「グルオオオオオオオオオオオオ!!!」

「うわあ!!! 出たあー!!!」

咆哮をあげ、木々をなぎ倒しながら姿を現したのは、巨大な翼竜だった。小山ほどもある体長、鋭い鉤爪。さらに口から火炎球のようなものを吐きながら、こちらに向かって突進してくる。

「うわああああああ!!!」

「な、ななななななんですかこれ!?!」

「見りや分かるだろ!?! ドラゴンだよ!! チノ、メグ、とにかく逃げろ!!!」

マヤに言われるまでもない。ドラゴンなど生で見ただけは当然なチノだが、その凶暴性は一目見ただけで分かる。三人は脱兎のごとく森の中の道を走り抜けて逃げ出した。しかし、翼竜は図体の大きさに反して意外とすばしっこく、行く手を邪魔する森の木々を器用にかわしたり、時々なぎ倒したりしながら、チノ達をしっこく追ってくるのだった。

ゴウツ! ジュツ。

「あわわわわわわわ……」

翼竜から放たれた炎が、チノの耳元をかすめていきローブのフードをわずかに焼く。今までティーテーブルの山で出現したモンスターは、どちらかというとな元の世界にもいた野生動物の延長線上のよう

な、どこか可愛らしさを残すモンスターが多かったが、こいつはあまりにも格が違いすぎる。もしもこれがゲームだったら山の奥とか、ダンジョンの最下層にでもいそうな風格のボスモンスターといった体だが、街にも比較的近い森の中になんでこんな凶暴なモンスターがいるのだろう——？

ドゴオオオオン！

「うわっちー！」

今度はマヤの方に鋭い鉤爪を突きたてようとする。それにしても先ほどからこの翼竜、マヤのことばかり執拗に攻撃しているような気がする。装備の重さから機敏に動けないメグと、足の速さで劣るチノは、素早い翼竜を前に一瞬逃げ遅れて無防備な体勢を晒しそうになる場面が何回かあった。だが、そんな時でも翼竜は、近くのチノやメグを狙わずにわざわざ遠くにいるマヤの方を狙ってくる、そんな場面が何回もあった。なぜ、マヤばかりを狙うのだろう。

「マヤさん、何だか狙われてませんか……？ 何かこの竜の機嫌を損ねるようなことしたのでは……」

「全く心当たりない！」

「あーっ！ 思い……出した！ この竜……『アップルミントティードラゴン』って種なんけど……普段は山奥に生える山菜などを食べて暮らしている草食の生態で、特に生の根菜類が大の好物なんだ!! 確か魔法生物学の授業で習ったよ!」

「そ、そんな名前なんですかこの竜!? それにこの顔で草食系って……はっ！」

メグの解説を聞いてチノも同じ結論に思い当たる。そう、生の根菜類——巨大ニンジンやマヤは袋の中に持っているのだった。

「マヤさん! それです! その袋です! その袋を捨ててください! あの竜、袋の中のニンジンを狙っています!!」

そう、翼竜はマヤの持つニンジンを狙っていたのだ。ニンジンを巣穴から持ち帰ったことで、匂いにつられた翼竜を山奥から招き寄せてしまったのかもしれない。それに気付いたチノは、マヤに対しニンジンに入った袋を捨てるように言う。ニンジンを捨てるということとは、

冒険者学校卒業の資格をフイにするということだ。それはチノにも良く分かっていた。でも、このまま翼竜に追われ続けたら、どこかで体力が尽きて致命傷を負ってしまうだろう。どんなものでも、命には代えられない。

「……」

「マヤさん！ 命と卒業とどっちが大事なんですか!!」

「……」

「マヤさん!!!」

マヤはチノの呼びかけに反応しようとしな。こうなったら無理やりに捨てさせてでも。そう思いマヤに近づく。

そして気付いた。マヤは、——泣いている。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―⑧

マヤの涙を見た瞬間、チノの脳内に記憶がフラッシュバックした。つい最近にも、マヤの涙を見た出来事があった。

あれは、三人の高校合格通知が届けられた日のこと。

三人ともまずは、勉強の面倒を見たり応援してくれたりした高校生組に合格を報告したのだが、その後、三人だけで集まってお互いの結果を報告し合うことになったのだった。

スマホで先に結果だけ聞くのが怖く、お互いの合否を知らないままに三人は集まった。

すぐにでも二人の結果が知りたく、いち早く口を開きかけたチノだが、その時のマヤは――

泣いていた。

美しい涙だった。

記憶にある限り、マヤが本気で泣いているのを見るのはこの時が初めてだったと思う。

チノは一瞬、マヤが不合格だったのかと思ってしまった程だ。

後からこつそり聞いた話だが、高校生組に合格を報告した際も泣いていたらしい。

誰よりも自分の目標に真剣だったマヤ。周囲の期待と応援に答えようと一生懸命だったマヤ。元気で無邪気なように見えて、人一倍プレッシャーに対しては繊細だったマヤ。

チノが見たのは、チマメ隊の中でも一番小さな体で一番大きなものを抱えていたマヤの、張り詰めた緊張が解けた瞬間だった。

今日の前で翼竜に追い詰められ泣いているマヤは、チノのよく知るマヤでは無いけれど。でも、抱えているものの大きさは、同じなのではないか。

巨大なニンジンの重みは、チノには分からない。けれど、マヤにとって冒険者学校の卒業資格の重みは、元の世界での高校合格と同じくらいに重いのもかもしれない――

「……………くっ！ 防御魔法！」

マヤに向かつて容赦なく襲い掛かる火炎を、間一髪のところで防護の魔法陣を張って食い止める。

マヤの涙を見て、チノの気持ちは変わっていた。マヤにエンジンを手放させる訳にはいかない。それをさせずに、このピンチを切り抜ける方法。チノの頭脳はフル回転でその方法を弾き出そうとしていた。(この状況を切り抜けるなんて、翼竜から逃げ切るか、翼竜を倒すかくらいしかないです。でも、飛ぶことが出来る翼竜をスピードで振り切ろうとするのはどう考えても不可能です。そうすると、この翼竜を倒すしかない……？ いやいや、逃げ回るだけでもやつとの相手を倒すだなんて、それこそ無理……)

ここまで考えてチノははっと気付いた。ドラゴンと邂逅するといふ出来事のアマリのインパクトの強さに今まで気付かなかったが、この翼竜、「ラビットクロニクル」の最終ステージで戦ったボスの翼竜と、行動パターンが全く一緒なのではないか。鉤爪攻撃、しっぽ攻撃、火炎攻撃——どれもゲーム世界で確かに見たことがあるモーションだ。

(仮定ですが……、この翼竜、「ラビットクロニクル」のボスと全く同じ行動を取り、同じ属性を持つよう設定されているとしたら……？ そうだとすれば、「弱点」もゲーム内のボスキャラと同じなのでは……？)

逃げ回り続けているマヤとメグの体力は限界を迎えつつあるように見え、同じく自分の体力も限界を迎えつつあるのを感じる。森の中を逃げてくるうちにだんだん森の浅いところまで来ているのも分かる。今は木々が邪魔してくれるおかげで翼竜は全速スピードを出せずにいるが、これ以上逃げ続けて森が開けて平野になるところにまで出てしまうと、ドラゴンはより危険な存在になる。最悪、人里までドラゴンを誘導してしまうことにもなりかねない。決着をつけるべき時が近づきつつあった。敵の「弱点」がゲームのそれと絶対同じと断言できる自信は無かったが、その可能性に賭けるしかない。

チノは、一瞬だけ翼竜の目をくらませて出来た隙を使って作戦をメグに手短に伝える。

「メグさん、敵の弱点は頭部です。私が補助魔法をかけるので踏み台を使ってジャンプして、頭上から一刀両断にしてください」

「えっ？ 何で弱点が分か……」

「とにかく！ 信じてください」

「でも踏み台になるものがないよ!？」

「それも私が用意できます！ 次に敵がしつぽ攻撃をしかけてきた時がチャンスです、メグさんなら必ず出来るはず……!？」

メグは不思議そうにしながらも、最後はチノの気迫に押され作戦をOKした。

次の瞬間、翼竜がチノの方を向き攻撃の予備動作に入る。チノは魔法の詠唱を行う。

「浮遊魔法です!!! おおおおおおお!!!」

ゲーム中のドラゴン戦では、ナツメ・エル姉妹のアバターである黒騎士がメグの踏み台になってくれた。しかし今は二人はいない——そこでチノは、あらかじめ目をつけておいたちようど良いサイズ感の小岩を浮遊魔法で動かし、踏み台代わりにさせることにした。「しめ縄」が飾られた大きな石だ。まるで何かの御神体のような見た目で、踏み台にするなど平時なら罰当たり極まりないのだが、今はそれに構っていられる状況ではない。それにしてもこのオブジェクト、どこかで見たとあるような気もするが——。

「メグさん、今です!!!」

「う、うん!!!」

メグが、翼竜の前に置かれた石を階段にするように足をかける。巨大なしつぽでチノをなぎ払おうとしていた翼竜だが、メグの意図に氣付いたのか、直前で狙いを石の方に変えた。鋼鉄並みに硬いしつぽが勢いよくぶつかり、石を粉々に粉碎する——だが、それよりコンマ1秒早く、メグは石を踏み切って飛翔していた。

1章：ココア先輩の優雅な異世界チュートリアル―⑨

「がおおおおおおおお!!!」

「ヴェアアアアアアアアアア!?!」

「グルアアアアアアアアア!!!」

上空から加速度をつけて振り下ろされたメグの戦斧が、翼竜の頭上に直撃する。メグの雄叫びと、翼竜の悲鳴が交錯する（何か変な叫び声も混ざっていた気がする）。クリティカルヒットだ！メグが着地してから2、3秒、誰も微動だにしない沈黙の時間が流れた。そして、静寂を破ったのは翼竜の方だった。翼竜はよろめいた後に地面にドオン！と倒れた。やがてその体は光に包まれていき――、無数の毛玉のようなものに分裂し、四方八方へと飛散していった。

「何度見てもこの光景は慣れないですね……、モンスターを倒すとティツピーになって散っていくなんて」

この、元の世界のティツピーにそっくりな生物は、この世界でもティツピーと呼ばれ、魔法生物、妖精の一種と考えられているらしい。姿かたちこそ元の世界のティツピーそっくりだが、ふわふわと空中を浮遊できる点は元の世界のティツピーとは異なる。チノもちゃんと理解していないが、この世界のモンスターは、ティツピーが集合して一定の生物の形を取り、一つの意思を持つかのように動き始めた存在なのだという。小さな魚たちが集まって大きな魚の振りをする、という幼少期に読んだ絵本のことをチノは思い出した。モンスターを倒すと、彼らは元のティツピーの姿に戻り、蜘蛛の子を散らすようにどこかへ逃げていってしまうのだった。これが光の粒とかになって消えるのだったら「幻想的」と思ったかもしれないが、多数の自分のおじいちゃんになって消えていくというのは何ともシニールな光景だ。「この毛玉も倒せば絶対経験値になると思うんだけどなく、でもめっちゃすばしっこいから、誰も捕まえたり倒したり出来た人がいないんだよな」

いつの間にチノの横に来ていたマヤがそう解説する。ついさつきまで泣いていたのに、すぐにケロッと立ち直っていることにチノは苦

笑しつつも安堵した。

「そうだ、メグさんは？　空中に大ジャンプし翼竜を斬りつけるという大立ち回りを演じた親友のことを案じてチノは駆け寄るが、幸いメグにも大したケガなどは無かったらしい。」

「そうすると、翼竜に斬りかかったときにもう一つ断末魔(?)のようなものが聞こえたと思っただのは何だったのだろう。確か「ヴェエアアアア」という風に聞こえたが――。」

「そこまで考えてはつと気付き、チノはあたりを見回す。無我夢中でドラゴンから逃げてきたので気付かなかったが、ここは間違いなく、チノが最初に目覚めた森の中の広場だ。ということは、メグに踏み台にさせ、ドラゴンの尾で木っ端微塵にされてしまった「しめ縄」つきあの石は、ココアが降臨してきたときにその場にあつた御神体(?)だったのでは――？」

そのことに気付いたチノは冷や汗をかいた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ココアきーン！　コーコーアーきーン！　二人の間を連れてきましたよー!?　どこかにいるんですね!?　出てきてくださーい！」

チノはマヤとメグの唾然とした表情にも構わず、一人で広場中に向かって呼びかけ続けていたが、答える者はいなかった。

「チノちゃんのかかった幻覚魔法、だいぶかなり重症みたいだね。街に戻ったらヒーラーに見てもらったほうが良いんじゃないかな……」
「だから、幻覚じゃないですー！」

「まーまー、仮にチノがここで何らかの霊的存在に出会ったのが事実だとしてだよ。そいつ、おそらくあの御神体みたいな石を依り代にしてたんだらうから、石が木っ端微塵にされた時点で消滅しちゃったんじゃないね？」

「そ、それは……」

「これだけ呼びかけてもココアが出てこない、という時点で、マヤの指摘が的を射ていることは認めざるを得なかった。チノはがっくりと肩を落とす。」

「正確に言うとう精霊や悪霊の類はエネルギー体だから、依り代を失っ

ても死ぬわけじゃなく、大気中の魔力の流れの中に霧散するだけなんだけどね。どこかでそのうちひよっこり会うこともあると思うから、落ち込むなよチノ」

マヤは慰めつつも、その後にごう付け足すのを忘れなかった。

「石が砕かれたときの『ヴェアアアアア!!』って悲鳴は私も聞いたよ。どうすればこんな声が出るんだろう?と思うような、この世のものは思えない恐ろしい悲鳴だったよな。こんな凄い断末魔を発するなんて、その霊はきつと現世に並々ならぬ恨みがある、物凄い悪霊だったんだろうな」

「えーっ、怖いなあ。私あの石を踏んじやったし、間接的に石を壊すのに手を貸したことになるけど、それで悪霊から呪われたりしたらやだなあ……。あとでお祓いを受けなきゃ」

すっかり悪霊扱いされるココアのことをフォローする気持ちの余裕はチノにはなかった。何しろ、この世界でのチュートリアル役を、文字通り踏み台にして木っ端微塵に破壊してしまったのだ。マヤとメグから色々教えてもらったとは言え、この先どうやって生き延びていけばいいのだろう。まして魔王を倒して元の世界に戻るなど出来るのだろうか……? チノの異世界生活は前途多難なものになりそうだった。

2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは

99—①

冒険者学校の卒業試験を無事にパスし、一人前の冒険者になった三人は何だかんだ卒業後も一緒にパーティを組んで活動していた。この世界についてまだまだ知識がなく、同年代の知り合いもマヤとメグくらいしかないチノにとってはこれは願ってもないことだった。

チノが女神ココアから聞かされたこと、というよりチノがこの世界に召喚された事実そのものを「幻覚」と取り合わなかったマヤだが、一つだけチノの話で興味を引かれた点があるようだった。

「その『女神』ってやつ、チノにチートスキルを付与したって言うってたんでしょ？ あと属性がどうかとも……。『チート』ってどういう意味か知らないけど、何か凄い能力に目覚めたかもしれないんだろ？」

一応、以前とスキルや属性に変化がないかどうか、神殿で鑑定してもらったほうが良いんじゃないかな？ 万が一にも本当に凄いスキルを持つてて、チノがばつさばつさと敵を無双！なんて可能性も無いと言いつつ切れない訳だし。うんうん、絶対鑑定してもらったほうが良いよ！」

「そんなスキルがあるとすればドラゴン戦の時に既に発揮されてるんじゃないかと思いますが……」

チノは冷静に突っ込むが、マヤはすっかり目を輝かせていて聞く耳を持たない。そのうちにメグまでもマヤに加勢し始めた。

「私達一人前の冒険者になったからクラスチェンジすることも出来るでしょ？ 自分がどういうスキルが得意でどういう特性があるのか把握する意味でも、一度鑑定してもらおうのも悪くないと思うけどなー」

という訳で、三人が冒険者活動を始めて数日目。街区から半日ほどの距離がある「神殿」なる施設をチノ達は訪れることにしたのだった。朝から街を出て、途中でお弁当を食べ、いい加減歩き疲れてきた頃になって、遠くの丘の上にゴシック建築風の荘厳な建物が見えてくる。

そこが「神殿」なる施設で、元々はこの世界で広く信仰されている神を祀る建築物のだが、どういう経緯か、冒険者たちの持つスキルや属性、得手不得手を明らかにしてくれる「鑑定」や、冒険者達を今までは違う職業に導く「クラスチェンジ」を行ってくれるのだった。「スキル」や「クラス」というのがどんなものかは、ここまでの戦闘経験でチノも感覚的に理解していた。たとえばチノは「ソーサラー」のクラスなので「回復魔法」や「補助魔法」のスキルがあり、「ガンナー」のマヤには「射撃」のスキルがあるといった風だ。「射撃」スキルを持たないチノは、マヤの銃を借りて使うことは出来るが、命中率や威力はマヤが使ったときとは比べ物にならない。また、「バーサーカー」のメグには「狂化」スキルがあり、戦闘中に理性を失うことで攻撃力を大幅に強化することが出来る。理性を失うといっても、メグのは度合いが軽く、普段のメグよりもテンパってより大胆な行動を取るようになる程度だったが。

一方、「属性」というものについては、マヤの教えを受けなくてはならなかった。マヤによれば、この世界には「炎」「水」「風」「土」「陽」「月」の六つの属性があり、人は必ず六属性のどれかに属しているらしい。属性同士には、「水」は「炎」に強く、「炎」は「風」に強く、「風」は「土」に強く、「土」は「水」に強いといった相性がある。どこかで聞いたような設定だが、ゲームの「ラビットクロニクル」でもそういうえばそんな設定だったかもしれない。冒険者学校時代に受けた鑑定結果では、チノは「陽」、マヤは「水」、メグは「炎」だったらしい。

2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは 99—②

神殿の門をくぐって大広間の中に入ると、受付役らしき神官が出迎える。「鑑定」が用件であることを伝えると、一度奥に引つ込み、別の神官を連れてくる。その連れて来た神官というのが――

「ようこそ、神殿へいらっしゃいました。天にまします我らの父は、必ずやみなさんの進むべき道をお示しになるでしょう。本日、みなさんの担当を務めさせていただきます、青山ブルーマウンテンと申します」

「よっ！ 青ブルマ、久しぶり〜」

「マヤさん何ですかその呼び方!?!」

「あら、チノさん、マヤさん、メグさん、覚えていてくださったんですね。嬉しいです」

神官はチノも良く知った顔である、青山ブルーマウンテンだった。元の世界では喫茶店ラビットハウスの常連だった小説家だ。この世界では神官をしているらしい。しかも、冒険者学校の生徒達のスキルを鑑定するためにたびたび学校にも出張してきていたので、マヤとメグとも顔見知りだという。青山さんも元の世界から召喚されてきた存在ではないのでしょうか――？ 色々と聞きたいことはあったが、また幻覚扱いされたりするととても面倒なことになりそうなので、チノは再会の挨拶もそこそこにすぐに本題に入ることにした。

「自分の持つスキルをもう一度測り直したいと……、お安い御用ですが、全てのスキルを測定すると多少、時間がかかりますよ」

「あと属性の判定もね。それにチノだけじゃなくて私とメグの方もお願いしたいかな。せっかくクラスチェンジ出来るようになったんだから、この際どんな職業が向いているのか徹底的に調べなおして、結果次第では転職しても良いと思うんだ」

「なるほど。確かにマヤさん達のように学校を卒業したタイミングで適性を測りなおす冒険者さんは多いですね。冒険者学校では概ねみ

なさんの志望に基づいてクラス分けをしています。ですが、学年の中で前衛職後衛職どちらかに偏り過ぎないように数を調整したりもするので必ず全ての志望が通る訳ではないですし、そもそも志望する職業と適性が必ずしもイコールという訳ではありません。今のみなさんのクラスはソーサラー、ガンナー、バーサーカーですが……今一度、進むべき道を見つめなおすというのも良いのかもしれませんが」

それではさっそく鑑定の間にお入りください、と言われ小部屋に案内される。

チノは鑑定と言うのは、魔法か何かを受けると一発で自分の持っているスキルや属性が分かるような、そんなイメージでいた。

しかし実際にはそんな簡単なものではなく、「時間がかかる」という言葉は誇張でも何でもないと分かった。まず、身長、体重、座高に視力聴力など、身体測定のようなことをさせられた。なぜかスリーサイズの測定までも。次に、剣、槍、斧、弓、鉾——色々な武器を握らされ、実際に軽く振らされたりした。どの武器を持っている時が一番軽く感じますか？なんてことも聞かれた。その次には、色々な魔法の試し打ちを命じられ、魔力の判定。さらに青山から様々な魔法をかけられ、対魔力の判定。こうやって一つ一つのようなスキルを持っているのか確認していくものらしい。魔力が終わると次は知能テストと心理テストのようなものを受けさせられた。それが終わると今度は各種技能のテスト。これは、「薬草の調合」とか「鍵開け」とかはまだ分かるのだが、「編み物」、「草刈り」、「リズムに合わせて踊る」だの、「部屋の主の目の前で堂々と壺を割ってみて怒られないかどうか試す」などの、冒険者稼業とどう関係あるのか全く分からないようなものまであった。

試験官である青山の目線が変わったのは、チノがまな板の上の粉を練ったようなものをこねさせられた時だった。その柔らかい物体に触れた瞬間、チノの手はパツと青白く光り熱くなった。これはいったい!? と思って慌てて手を放した瞬間に物体は回収され、すぐに次の試験に移るように言われたので、結局何だったのかはよく分からなかった。でも、あのむにむにとした触感、ココアさんと一緒にパン作りを

した時によくこねていた「パン種」だったので？——とチノは思った。

2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは

99—③

「ふわああ……」

「よ、ようやくこれでテストも全部終わりですか……」

「疲れたー。こんなに時間かかるし色んなことをさせられるなんて思わなかったよ。こういうのって魔法とかで一発で分かるんじゃないのかよー」

何時間もかかったスキル測定が全て終わり、疲れた口調で口々に喋り始める三人。だがその時、試験官役の青山が不敵な笑みを浮かべながらこう言った。

「あらあら、これで終わりではないですよ。みなさんがどの職業に向いているか、それを調べるための適性テストがまだ終わっていません。これは実際にみなさんに色んな職業になってもらって試すしかないですね。さあさあ、転職の間へどうぞ、です」

「ラビットクロニクル」でもそうであったように、この世界での転職というのは職を司る女神に祈りを捧げることで簡単に出来るものらしい。今のチノはいかにも「ソーサラー」感のある魔法使いのローブ風の格好をしているが、祈りを捧げると自分の服が光に包まれ、一瞬にしてその職業にふさわしい格好に変化してしまうのには驚いた。

という訳で、青山の読み上げるリストに従い、次々と女神に祈りを捧げて新しい職業を試していくことになったのだが――

「ガンナー」

「二丁の拳銃を同時に操るのは私の器用度では難しそうですね……マヤさんはよくそんなことが出来ますね。それはそれとして、この衣装お腹がすーすーします」

「バーサーカー」

「う……ぐっ……ガントレットとレッグガードだけでも結構な重さがあるのに、さらにこんな斧を持つなんて……、メグさん凄いです。あとやっぱりお腹がすーすーします」

「踊り子」

「戦闘の役にあまり立ちそうにありませんが、これも冒険者の職業なんですか？　そ、それにこんな大胆な衣装、私には似合わないです……」

チマメの三人は、ラクス・シャルキ（ベリーダンス）で着るようなアラビアンな踊り子衣装に着替えさせられていた。セパレートの衣装で、腰から下はスカーフを巻いている。頭からは体を覆えるくらい大きいシヨールをかぶっているが、布地が薄く肌が透けて見えるので、メグ以外の二人の起伏の無い体ですら煽情的に見せていた。

「チノさんに似合わないということは無いですが、この衣装はメグさんが一番似合っている気がしますね〜」

「そ、そうかな〜？」

（何でしょう、この衣装が似合うかどうか、イコール体が成長してるかどうかだと思おうと複雑な気分……）というか薄々気付いていました。メグさんいつの間にかこんなナイスボディになってたんでしょう。

「では最後の職業行きますね。『遊び人』」

「それもはや職業でもなくないですか!？」

ツツコミながらもチノが祈りを捧げるとアラビアンな踊り子服が光に包まれて次の服に変化する。手品師の使うようなステッキにシルクハット、体のラインがはつきり出る白のレオタードと黒のタイツ。そして頭には大きなうさ耳——何と、チマメ隊の三人はバニーガールに変化した。

「なっ！　何ですかこの衣装!」

「面白れー、バニーガールなんて初めて着たよ!」

「私は元から生えてるうさ耳の上にさらにうさ耳ヘアバンドが着くからなんだかちよつと変な感じー」

「これ、遊び人というよりは、遊び人が好きそうな場所にいる人なのでは……?　というかやっぱりどう考えても冒険者の格好じゃない……」

「まあまあ、良いじゃないですか。みなさんを楽しませたり、喜ばせたりする、心を潤すオアシス的な存在……遊び人だって立派な職業です

よ。こんな見目麗しい店員さんたちのいるお店、実際にあれば是非行って私も潤されてみたいです」

「あ、青山さん私の太ももを凝視するのはやめてください……それにこの格好で『他の人を喜ばせる』と言うと、何かいかがわしい意味に聞こえます」

バニーガールといい踊り子といい妙に露出度の高い路線の衣装が多かったですが、まさか単なる青山さんの趣味なのでは？——、そんな疑いがチノの中で頭をもたげてきていた。

2章：あのモフモフを倒せなくてもパン焼きレベルは 99—④

とにかくこれでリストにある全ての職業を試した。チノ達は別室に集められ、青山からの鑑定結果の発表を聞くことになった。

「えー、こほん。ではまず、みなさんの『属性』の鑑定結果から発表させていただきます。マヤさんとメグさんは、前と変わらず『水』、『炎』の属性でした。チノさんの属性ですが、……おめでとうございます！

チノさんは『姉』属性でした！」

「姉」

「あね？」

「姉……？」

「そう、姉です」

いやいや、おかしい。チノは頭痛がしてきた。この世界での属性は「炎」「水」「風」「土」「陽」「月」の六つという話だっただけではないか。

「それは一般的に知られてる属性ですね。極めて確率は低いですが、ごく一部の選ばれた者だけが属する属性として『姉』『妹』というものがあることが知られています。『姉』属性は六属性全てに対して有利ですが、『妹』に対しては互いに互いの攻撃が通りやすいという関係にあります」

「いやいやいや……『炎』『水』『風』『土』『陽』『月』は、四元素説とか、五行思想とか、何かそういうのありそうだなって分かりますが、『姉』『妹』って何ですか突然そんなものが入ってきておかしいです私は絶対に認めません」

「そう言われましても、古代の魔術師が間違いなく観測し存在を証明したものです……」

「チノ、すげえじゃん！ 隠し属性なんて！ しかも他の属性全部に有利とかめちやくちや強いし、かっこいいなー。やっぱり女神が能力を与えてくれたのかな？」

マヤの言うことの前半には素直に頷けなかったが、後半には同意

だった。「姉」属性だなんて、そんな変なことをするのはココアさんの仕業に違いない、自分がお姉ちゃんになりたいからって私も「姉」になったら喜ぶと思ったんでしょーか——、そんなことを考えるチノだった。

「では続きまして、スキルを発表させてもらいます。鑑定結果は一覧表にしてみなさんの手元に配りましたのでご確認ください。特筆すべきは、チノさんのスキルですね。何と、『パン焼き』スキルがMAXの99まで行っていることが確認できました」

「パン焼き」

「チノちゃんすごーい、パンの焼き方なんていつ習ったのー？ 今度食べさせて欲しいなー」

メグはのんびりした口調で言うが、チノはさらに頭痛が増してきた。これも（自称）女神ココアがくれたものに違いない。でもこれは冒険に一切関係ないし、魔王を倒すまで元の世界に戻れないのであれば、どうせなら魔王討伐に役立つようなスキルをくれれば良かったのに。

「最後にみなさんのスキル・属性を考慮しての、適性職業を発表します！ どうるるるる……」

青山が奇妙な効果音を口で発し始める。ドラムロールのつもりなのだろうか。

「じゃん！ まずメグさんですが、適性職業は『踊り子』と判定されました」

「ええーっ！ 私が踊り子なんて、そんな、似合わないよー」

「メグさんは運動神経、リズム感が高く、また心の奥底には自分を表現したい、美しいものを愛でたい、誰かの憧れの存在になりたいといった願望を秘めています。恵まれたボディの方もまだまだ成長が見込めますし、踊り子はまさにぴったりの職業と言えるでしょう」

（メグさんが踊り子。元の世界ではバレエが得意だったし、ゲームセンターでもダンスゲームで高得点を出してましたし、結構当たってる気がします）

「続いてマヤさんです。適性職業は『賢者』と判定されました」

「へ……？ 賢者？」

「高い魔法適正と知力を示したことはもちろんですが、賢者にはパーティーのリーダー、アドバイザーとしての人格が求められます。マヤさんの天真爛漫のように見えて実は将来を見据えている思慮深さ、周囲への気遣い出来る繊細さといった要素が賢者に向いていると判定されました」

「なっ……！」

（マヤさん、真っ赤になって口をぱくぱくさせてます……。凶星なのでしょうか。本人は認めたがらないかもしれませんが、これも結構当たってるような気がします）

青山の生まれつき持っているミステリアスな雰囲気は、この世界では清廉な白い神官のコスチュームに身を包むことで一段と濃いものになっていった。そういった雰囲気から心の底を見通されているような気分になるからかもしれないが、マヤ・メグに対するコメントはどれも的を射ているように思われた。では、私はどうなのだろう、青山さんは私のことをどのように言い当てるのでしょうか——、チノは緊張した面持ちで唾を飲んだ。

「えー最後にチノさんですが適性職業は『パン屋』でした。とにかく何と言ってもパン焼きスキルがMAXなので性格とか向き不向きとか関係無しにパン屋になるしかありません。この国のパン史を振り返ってもレベルMAXまで行ったパン職人は一人もいないそうです。開業すれば伝説的パン屋になりますし、逆にパン屋にならないのは人類の損失です」

「二ですよねー!!!」

拍子抜けというか、ある意味予想通りの結果だった。女神ココアからチートパン焼きスキルを授かったのだから、パン屋になる。これ以上分かりやすいことはない。

「さて、結果発表はこれにて終了ですが、いかがでしたでしょうか？

せっかくどんな職業に適性があるのか分かりましたし、もしもみなさんにその気があれば、この場でクラスチェンジしていくこともできま
すが……」

青山の問いかけに対し、チノはマヤ・メグと顔を見合わせる。その表情には、チノが頭の中の考えているのと同じ結論だ、と書かれていた。そう、我ら永遠、チマメ隊。言葉を交わさなくても、以心伝心でお互いの考えていることは分かる。三人は揃ってこう言った。

「せっかくだけけれど、踊り子にはならず元の職業を続けたいかな。自分の壁をぶち壊せるかな、と思つてバーサーカーを選んだ時の気持ち、最後まで忘れずにいたいんだ」

「賢者が向いてるなんて言われても意外すぎて実感ないし。それに私、呪文の詠唱とかするよりは物理で敵をバンバン撃ちたいんだよねー」

「というか私は魔王を倒さなければならぬので、パン屋さんになつている暇はありません。美味しいパンにはちよつとだけ未練ありますけれど」

青山は、なるほど、と頷きこう語った。

「お三方とも、自分が選んだ今の職業をもう一度選ばれる……と。それはとても素敵なことですね。自分に出ることや向いていることを生かす、天から与えられた使命に邁進するのももちろん素敵だと思います。ですが、敢えてそれらには目を向けず、自分のやりたいことを選ぶ……、それもまた生き方なのでしょう。自分の選んだ道を後から振り返つて見ると人生になつていて、そんな生き方。是非、そんな生き方でしか出会えないセカイと自分に、出会ってくださいね……、つて、あらー?」

語り終わつた青山は目を丸くした。さつきまで青山の目の前にいたはずの三人がいない。チノ達三人は、既に青山の前から離れ、新たな旅立ちに向けてやる気満々になつていた。

「ありがとなー! 青ブルマー! じゃあ私達もう行くねー!」

「ちよつマヤさん……だからその呼び方は……」

「今の職業のままで行くと決まつたからには、早速レベル上げしなくっちゃね」

そのまま慌しくチマメ隊は去つていき、その場にいるのは青山だけになった。ポツンと残された青山の叫びが神殿にこだました。

「ちよっ……マスター!? 私今いいこと言ってみましたよね!? せめて天国のマスターだけでも私を褒めてくださーい!」

3章：私が私を見つめてました―①

世界樹、というものがこの世界にはある。高さ数千メートル級の、この世界の中心とも呼ばれている大樹だ。遠く離れた国からでも、この樹が空高くまで生え、雲を突き破った上まで育っているのを見るこ
とが出来る。だが実際にはこれは一本の樹ではなく、何万本もの樹が
ドーナツ状に集まって群生し、天に届くまでに成長したものである。
ドーナツ状なので当然真ん中は空洞なのだが、その空洞を「ティツ
ピーストリーム」という地面から空に向かう白い光の粒の太い流れの
ようなものが貫いている。遠くから白い光の粒のように見えるもの
は、実は全部ティツピーである。この世界では倒されたモンスターは
ティツピーになって飛散するのが観測されているが、人間も死ぬと魂
はティツピーに還ると考えられている。それら世界中のティツピー
が集まってきて、世界樹のエネルギーを得て新たな生命を成す存在と
して生まれ変わり、再び世界に散っていくための流れ、つまり世界中
のティツピーの大動脈――ティツピーストリームはそのような存在
だと考えられていた。

魔法生物であり魔力エネルギーそのものでもあるティツピーが集
まる場所なので、この世界樹には世界中の様々な秘術や秘法が集まる
とも考えられていた。なので、中は危険で広大なダンジョンのようにな
っているこの世界樹を、貴重な魔術を手に入れるために登頂しよう
とする冒険者は後を絶たない。

チノ達がこの世界樹を訪れたのも、二つの目的があつてのことだつ
た。一つは、魔王を倒すための伝説の召喚魔法がこの地に封印されて
いるとの噂があつたからだつた。だが、そもそも魔王という存在自
体、この世界では影が薄い。「モンスター達を束ねるボスの存在」と認
識されてはいるものの、軍を率いて街を攻めるとかそういう実害をも
たらしている訳ではないようで、時々遠くのダンジョンで冒険者パー
ティが魔王に襲われたという噂話が出るくらい、「危険だがどこ
か自分とは関係ない世界の存在」と思われていた。そんな訳でこの世
界の住民は魔王を倒そうというやる気が薄いので、魔王を倒す手段だ

という「伝説の召喚魔法」もわざわざ探しに行くような物好きは少なく、噂がどこまで信用できるのかは不明だった。

もう一つの目的について説明しようと思うと、チノと青山との数日前の会話にさかのぼることになる。

「死者を霊体として一時的に召喚し、会話できるようにする降霊術……ですか。それが世界樹にあると」

「ええ。信頼できる筋からの情報でそれを確認しました。ですが、私は神官としての職務があり持ち場を離れることが出来ない身。チノさん達にもし取ってきていただけるならば、謝礼もはずみまずし、事前に冒険のための資金援助をする準備もあります。つまり、これは私からのクエスト依頼ということになりますね」

そういつて青山が示した具体的な金額を見ると悪くない話である。しかし、一番気になったことをチノは尋ねずにはいられなかった。

「青山さん、亡くなった『誰か』とお話してみたいんですか……?」

「……ええ。実は、お世話になっていた喫茶店のマスターがいたんです。私が神官の採用試験を受ける際にも色々とアドバイスをいただいたのですが、新しい仕事で忙しく足が遠のいているうちに帰らぬ人になってしまい……。せめて、試験に受かった報告だけでもしたい、そう思っているのです」

「依頼してもらったのは嬉しいですが、私達はまだ駆け出しの身です。世界樹のようなハイレベルダンジョンにどこまで太刀打ち出来るのか分かりません。確実な成果を手に入れたいなら、ベテランの冒険者さんを雇ったほうが良いと思いますが」

「正直なところ、チノさん達くらいしか頼める人がいないというのはありますが……。これはどちらかというと私の気持ちのけじめの問題なのです。それにマスターの経営していたのは冒険者たちをサポートする『冒険者のカフェ』でした。新人冒険者であるチノさん達の冒険を助けることで、マスターへの不義理のせめてもの償いになれば、とも思っています」

死者を呼び出すという行為の冒流的な響きへの抵抗もあって、チノはこの件にそこまで乗り気ではなかったのだが、青山の提示した報酬

の魅力には抗いがたく、マヤ・メグとも話し合った結果、賛成派のマヤに押し切られるような形でクエストを受けることになった。その後、世界樹というダンジョンの特性について青山から色々教えてもらったが、「クエスト達成よりもチノさん達の安全が第一です。脱出アイテムをお渡ししておきますので、危ないと思ったら早めに使ってくださいね」と付け足すことを青山は忘れなかった。

青山がお世話になっていたという「マスター」は、おそらく元の世界の「マスター」と同一の存在——つまり、チノの祖父のことを指すのだろう。青山は気持ちの整理のために今回のクエストを依頼したと言っていたが、どう気持ちの整理をつけたら良いのか分からないのは、むしろチノの方だった。元の世界でも祖父は数年前に亡くなったが、どういう訳か、香風家のペットだったうさぎのティツピーに祖父の魂は乗り移ったのだった。一方、この世界でのティツピーは世界中に溢れている野生の魔法生物であり、ラビットハウスで飼われているなんてこともないし、この世界に来てからは祖父の存在をどこかを感じたこともない。祖父はこの世界では安らかに眠っているのだろうか。そうだとすれば、その眠りを妨げるのは果たして良いことなのだろうか。しかし他方で、降霊術を使えば霊体ではあるものの生前そのままの姿の死者に出会える、というのは魅力的ではないと言ったら嘘になる。この世界の魔術を使つて、(ティツピーではない)おじいちゃんをの姿をもう一度だけ、一目見たいと思うことは悪いことなのだろうか——？ 無論、依頼された以上はクリアのために全力を尽くすつもりではいたが、チノの気持ちは内心複雑に揺れていた。

だが、いざ世界樹の中を攻略し始めると、それどころではないとんでもない出来事が起こってしまったので、そんなことを悩んでいる暇はなくなってしまった。

3章：私が私を見つめてました―②

「ナツメ！ そのたからばこはわたしがさいしよにみつけたんだよ！
かってにとらないでよー！」

「ちがうよマヤ！ わたしのほうがはやかっただよー！」

「マヤさん！ ナツメさん！ ダンジョン内で喧嘩はやめてください
！」

「うえーん！ ころんでひぎをすりむいちゃったー！」

「エルちゃんだいじょうぶ?! はやくこのやくそうをたべてよくなっ
てね?。」

「エルさん！ 大丈夫ですか?! メグさん！ その薬草は傷口に擦り
こんで使うものなので食べさせないでください！」

(あわわわわ、いったい何がどうしてこんなことに……)

チノはマヤ・メグのほかにナツメ・エルを加えた五人パーティーでダ
ンジョンの門を叩いていた。世界樹はレベルの高いダンジョンであ
ることから四人以上のパーティーでないことと入ることが出来ないので、一
緒に入ってくれる仲間を探していたのだが、ちょうど「ラビットクロ
ニクル」をプレイしていた時と同じように、黒いフルアーマーに身を
包んだ騎士、ナツメとエルが誘ってくれたので、一緒にダンジョンに
潜ることになったのだった。ナツメ・エルは、この世界ではマヤ・メ
グとの面識は無かったようだ(もちろんチノとも)が、世界樹に向か
う道のりの中で徐々に打ち解け、特にナツメとマヤはお互い軽口を叩
き合う仲にまでなっていた。

大事件が起こったのはダンジョンの中層に差し掛かった頃のこと
である。先人の残した地図によればこの周辺から、「魔力溜まり」と呼
ばれる、ティツピーストリームから枝分かれしたティツピーが池のよ
うに偏在している場所への道があることが分かっていた。世界樹に
封印されている貴重な魔術のほとんどは「魔力溜まり」に存在すると
考えられていたため、チノ達にとつてもそこに至る抜け道を探すのが
最優先課題だった。だが、道の中々発見できずにいる最中、先頭を行
くマヤがうっかりトラップを踏んでしまい、床の装置から怪しげなガ

スが吹き出てきたのだった。チノは一人でしんがりを務めていたので、すんでのところでガスを避けることが出来たが、マヤ・メグ・ナツメ・エルの四人は、まともにガスを食らってしまった。いったいどんな強力な毒性が!?!とチノは慌てたが、ガスの白い煙が引いて視界を取り戻したとき、チノの目に入ったのは、何と、「子供の姿になったマヤ・メグ・ナツメ・エルの四人」だった。

いや、子供というのは正確ではないのかもしれない。四人は、背が低くて三頭身くらいになり、獣耳のようなものを生やした姿になっている。どちらかというところは、「ラビットクロニクル」でココア達年上組が作っていた小人族のアバターの姿だ。とてとてとて、と短い手足をばたつかせる歩き方も、ゲーム中のモーシヨンにそっくりである。だが一つ、ゲームのアバターと違うところを挙げるとすれば――「たからばこのなかみはぱんけーきだったよ！ みんなでたべよう！」

「まってマヤ！ じぶんのぶんだけおおきくきりわけてない!?!」

「いや待ってください、宝箱の中に入っていたパンケーキとか一体何年ものですか!?! 罫の可能性とか以前に普通に普通にお腹壊すので食べないでください!?!」

「メグさん、やくそうありがとうございます……、おれいにこれをあげるからすきなすうじをかいて?。」

「すうじ? なにかよくわからないけど、わあいエルちゃんありがとう!?!」

「エルさんそれは貴重な魔法の巻物です！ いざという時に使えないと困るので書き込みNGです！ そしてメグさんも普通に貰おうとしないでください!?!」

そう、四人は中身がまるで子供、それも幼稚園児くらいになってしまっているのだった。元の世界で小さくなつた年上組のアバターを見て、「まるで幼稚園みたい」とチノは思ったが、これでは本当に幼稚園だ。さしづめチノは遠足の引率で苦勞する新米の先生と言ったところか。

「ねーねー、ぱんけーきたべちゃだめなのー?。」

「おなかがへったよー」

「わたしもー」

「おべんとにしようよー」

やれやれ、これでは本当に遠足みたいです、とチノは思った。どつちみちこの状態ではまともに探索など出来そうにない。チノはいつたん休息を取ることにした。

3章：私が私を見つめてました―③

世界樹は何万本もの木が集まり一本の大樹のような姿をなしているダンジョンである。木の上ではあるが、太い枝同士が複雑に絡まりあつた上にさらに地層が積もっているので、場所によつては広い地面のような足場が出現する。そういった足場の一つにモンスター避けの結界を張り、地面にピクニックシートを敷いて休憩場所にすることにした。

「みんなで仲良く分けるんですよ。好き嫌いせずよく噛んで食べてくださいね……」

お弁当代わりの携帯食料を広げると、四人の「子供」達は夢中になつて食べ始めた。自分と同年代のはずの友達がまるで五歳の子供のように食べ物を取り合つたり分け合つたりしてるのを見るのは、何とも不思議な気分だ。

いや、よく見ると一人だけ食べていない子がいる。マヤが、じーつとチノの方を見ているのだった。

「マヤさん、どうしたんですか?」

チノも自分の食料を食べようとしていたが、あまりにもマヤに見られてるので食べ辛い。お腹が痛いとか、体の具合が悪いのだろうか? それとも単にこつちの食べ物の方が食べたいとか? 色々考えしていると、何とマヤがチノの胸に飛びついてきこう言った。

「おっぱい!」

「お、おっぱい!?!」

「ちののおっぱいのみたい……、のませて?」

「なななな、何を言っているんですかマヤさん!?!」

マヤは子供化した見た目に反して俊敏で力もあり、チノはシートの上に押し倒されてしまう。マヤがチノのローブをまさぐり、下から脱がせてチノの胸をあらわにしようとするのでチノは焦る。

ところで話は変わるが、チノはこの世界に来て一つ非常に困り悩んでいることがあつた。それは、ブラジャーがどの店でも売っていないということである。はじめ、この世界が「ラビットクロニクル」の世

界だから、ゲームに登場しないアイテムは存在しないのかと思った。だがゲームに登場しない他のこまごまとした日用品などは雑貨店で普通に売っているのです、そういう訳でもないらしい。なぜかブラジャーだけが売っていないのだ。では、マヤやメグはどうしているのか？ 一緒に着替えをしている時などに観察したが、どうやら二人もブラはしていないようだ。メグなどかなり胸が育ってきているし、戦闘で走り回ったり飛び跳ねたりすると凄いことになってしまっているのではないかと思うが、とにかくブラはしていないかった。聞くところによるとブラジャーと言うのは近代になってからの発明であり、中世ヨーロッパでは存在しなかったらしいので、中世風の世界観を忠実に再現した結果なのかもしれない。この世界は銃も便利魔法も存在する「なんちゃって中世風」の世界観なのに、その部分だけ史実を再現する意味は分からなかったが。いくら成長に乏しいチノの胸とはいっても、支えるものが無いのは落ち着かないが、無いものは仕方がなく、チノはこの世界に来てからというものの一度もブラジャーを着けず過ごしているのだった。

話を戻すと、そういう訳でノーブラだったチノの胸はマヤによってあつという間にあらわにされてしまった。無防備に外気に晒されてしまったチノの桜色の突起に、マヤの小さい口が吸い付く。

「あむ……ちゅ……ちゅば……ちののおっぱい、おいしい……」

「んっ……あっ……ん……、マヤさん、やめ……」

やめてください、と言いかけるが、一心不乱にチノの乳首を吸うマヤの様子を見て、チノは不思議と嫌ではない気分になっていた。敏感な乳首の先を転がすマヤの舌の感触はチノの頭をぽーっとさせる。マヤ達の見たい目は人間で言ったら五歳くらいで母乳が必要な年齢とは思えないが、もしかしたら種族特性的に大きくなってママのお乳が必要とか、そういう事情があるのかもしれない、そんなことをチノは思った。もしも私に将来赤ちゃんが出来たら、こんな感じなのでしょうか――。

「ってマヤさん!! 他のみなさんは普通に食べ物食べてますよね!!? それに私の胸からおっぱいが出る訳無いです!! 本当にやめてく

ださい!!」

はっと気付きマヤに喝を入れる。するとマヤはちえー、という顔を
してチノから離れ、メグ・ナツメ・エルと一緒に携帯食料を食べ始め
た。別にミルクが飲みたかった訳ではないようだ。だとすると何で
こんなことをしたのだろうか。

「まままままままったく、マヤさんはふざけすぎです……」

チノは赤面しながらも服の乱れを直して何とか落ち着きを取り戻
した。メグ・ナツメ・エルが食事に夢中だったので、マヤとチノの行
為には気付いていなさそうなのが幸いだった。

3章：私が私を見つめてました―④

気持ちを落ち着かせたチノは今後の方針を考え始める。詳しくは分からないが四人がかかってしまったのは種族が強制的に変更されてしまう呪い、または精神が幼稚化する呪い、あるいはその両方なのだろう。この手の呪いは、時間経過で解けるものもあれば、ダンジョンのフロアのボスを倒すなど一定の条件でしか解けないものもある。前者であればこのまま時間を潰せば済む話だが、後者であるとする仲間全員が子供化してしまった今のパーティーの戦力ではかなり厳しいだろう。いずれにせよいったん街に戻り腕の良いヒーラーに頼めば呪いを強制的に解くことは出来るが、それにはお金がかかる。脱出アイテムを使ってヒーラーを頼れば青山から提供された資金は使い果たしてしまい、もう一度ここに来ることはできないだろう。つまるところクエスト失敗である。前進か、撤退か――考え込んでいると、チノの鼻先に円いものがびよびよこと突きつけられた。

「チノおねえちゃん、おべんとうたべないのー？ たべないとからだこわしちゃうよー」

「お、お姉ちゃん!？」

見ると、メグが携行食のビスケットをチノの目の前に差し出していった。

「お姉ちゃん」の単語に反応するだなんて、まるでココアさんみたいですよ――自分で自分の行動に苦笑しつつ、チノは差し出されたビスケットをありがたくいただくことにした。

「ありがとうございます。メグさんはこんなに小さくなくても優しいんですね」

「こんなにちいさく?」

この状況を理解していないのか、それとも大きい姿だった時の記憶を失っているのか、メグがことん、と首を傾げる。

「すー、すー……」

食事が終わると、子供四人組ははしゃいだ疲れが出てきたのかうとうとし始め、あっという間にそのままお昼寝モードに入ってしまった

た。先ほどまであれほどはしゃぎ回ってチノを手こずらせた四人だが、眠ってしまうと無邪気な寝顔が可愛らしい。こうやって寝顔を眺めているとまるで子供みたいです、いや本当に子供なんですけど、とチノは思う。

チノの食べた乾いたビスケットも、お腹の中で水気を吸って膨らみ、チノの満腹中枢を刺激していた。四人につられるかのようにチノも眠くなってくる。ぼんやりしてくるチノの思考はいつのまにか四人が子供化する直前に考えていた問題にまた戻ってきていた。

(降霊術。私はそれを手に入れるべきなのでしょいか)

十五歳にして身近な人との別れを二度も経験しているチノである。自分の目の前から突然いなくなった人に焦がれる気持ちは人一倍あった。だが、自分の世界から遠く離れた異世界で、死者の安らかな眠りを覚ますのが果たして良いことなのかどうか。

ふと、こういう時はココアさんだったらどういうアドバイスをくれるだろう、と思った。初日のチュートリアルで出会った女神ココアが元の世界のココアと同一人物なのかは分からないが、いずれにせよココアとはここ数週間会っていない。元の世界にいた時は、ココアが帰省していた一週間を除きほぼずつと一緒にいたので、こんなに長い間離れているのは不思議な気分だ。——ココアさんがこの世界にいたらどんな職業でどんな冒険者になっていただろう。肉弾戦が得意そうなイメージは無いし、地味な補助役をやりがるイメージもない。案外、華のある魔法使いとかをやりがるかもしれない。手品の練習をして、マジックショーをやりたいとか言っていたし。手品といえば、ハロウインの夜、私に見せてくれた手品のタネは最後まで分からなかった。いや正確に言うとうと手品自体は昔母がよく見せてくれたものだったのでタネはよく知っている。ただお世辞にも手品が上手いとは言えないココアさんがどうやって短時間であの手品を習得したのか、そもそもあの手品をどこで知ったのかは謎だった。あれはあのお祭りの一夜にだけ起こった奇跡か何かだったのだろうか——そんな脈絡のない思考があつちこつちに飛び回るうちに、チノのまぶたはいつの間にか重くなっていった。

3章：私が私を見つめてました―⑤

(……ノちゃん！ チノちゃん！ 起きて！)

「んう、すう……」

(チノちゃん、起きてっば！)

「!? わああ!!! いつからいたんですかココアさん!?!」

「……あさん!? ……あさんてだれー!?」

チノははつと目を覚ました。いつの間にか眠ってしまったようだ。ココアに起こされたような気がしたが、それは夢の中の出来事だったらしい。目の前で自分を起こそうとしているのはココアではなく、小さい姿のメグ・エルの二人だ。

「な、なんでもないです……。そ、それよりどうしたんですか？ 私を起こしてくれたみたいですが」

と言いながらハツと気付く。周囲を見回すといるのはメグ・エルの二人だけで、一緒にいるはずのマヤ・ナツメの姿がどこにも見当たらないのだった。チノは一気に青ざめた。

「マヤちゃんが、マヤちゃんが……」

「ナツメちゃんがたいへんなの!!!」

メグ・エルの二人が結界の外を指差す。まさか結界が破られて二人がモンスターに連れ去られてしまった!? 慌ててチノは二人の指差す方に駆け寄るが、結界の外に出ようとした瞬間、ぶよぶよとした空気の壁に阻まれた。結界は破られていなかったようだ。だとしたらなぜ二人は結界の外に？ この結界は外のモンスターから中の人を守るだけではなく、中にいる人も外に簡単に出られなくする、ベビーベッドのような効果を発揮するはずなのだが――

「ふたりはティツピーをおいにかけていつちやったの!」

世界樹の中では、ティツピーストリームに合流しようとするティツピーがふわふわとその辺を漂っていることがある。二人はそれを追いかけて外に出て行ってしまったようだ。この結界は外からの守りは磐石だが、中からはティツピーのような高魔力体がぶつかると一時的にすり抜けてしまうことがある。それに一緒についていったマヤ

とナツメも外に出てしまったのだろう。チノは急いで結界を解除し外に出てみるが、そこで目に入ってきたのは――

「マヤさん!? ナツメさん!? 何でそんなところに!?!」

マヤとナツメの二人が、地面になっていて枝が空中に張り出しているところの端にぶら下がり、今にも落っこちそうになっていた。はるか下に見える下層まではかなりの距離があり、落ちたら怪我では済まないだろう。ティツピーを追いかけているうちに端で足を踏み外してしまったのだろうか。

「マヤさん、ナツメさん、これにつかまって……」

慌てて二人がつかまれるような長いものを探すが、手元にあるのは杖くらいだったのでそれを差し出す。だがぎりぎりのところで届かず、二人の手は空を切ってしまう。届かせようと思ったらもう一歩前になければ。細い枝の上で不安定な体勢ではあるが、四つんばいになり一歩進む。だがその瞬間、ギシ、という嫌な音がチノの下からして――

「うわああああああ!??!」

「あつ!!!」

枝がだわんだ拍子に、マヤとナツメの手が枝から離れてしまう。二人の体が落下し始め――

（そ、そうだ、浮遊魔法!! なんでそれに気付かなかったのでしょうか!）

だが魔法の発動は一瞬間に合わず、マヤとナツメの姿はチノの目の前から消えてしまった後だった。

――何ということだろう。二人を助けられなかった。さつきまで目の前にいたのに。私のせいだ。私がパニックになって自分が浮遊魔法を使えることを忘れてしまえば。居眠りしたりしななければ。罫の存在に気付けていれば。いや、そもそもこんなクエストを受注しなければ。そんな思考が脳内を駆け巡る。ショックで呆然としながらも下を見ると――

「おーい、ちのー! なんでぼーつとしてるの? おりてこいよー」

「あつ! こっちにぬけみちみたいのがあるよ!」

「!?!?」

何と、マヤとナツメは無事だった。下層に着地し、ケロツとした顔で、チノに下りて来い、などと言っている。下層まではどう見てもちよつとしたマンシヨンの高さくらいはある。この高さから落ちたら無傷では済まないはずだがどうして？ 二人に怪我なかつたことにホツとしつつも頭にはてなマークが浮かぶ。

さらにびっくりすることが起こったのは、チノがロープを使ってゆっくりと下層に下りようとした時だった。チノはメグとエルもロープを使って下ろそうとしたのだが、メグとエルは、何の道具も使わず切り立った崖を器用に駆け下りてチノより先に下層に下りてしまったのだ。

「なっ……」

「みた？…これがわたしたちの『しゅぞくとくせい』なんだよー」

チノも下に下りたところで、四人が色々と説明してくれた。そのたどたどしい話をまとめるとこういうことになる。彼女らは、種族の特性として体が人間の子供以上に軽い上に運動神経が抜群なので、人間は素手で上れないような高いところに駆け上ったり駆け下りたりできるし、高いところから落ちても落下速度を減衰しながら空中でバランスを取ってうまく着地することもできるのだそうだ。ちようど、猫が木の上に驚くほどの速度で駆け上ったり、木から落ちても無事に着地できたりするようなものだろうか。そういえば彼女らも猫耳のようなものを生やしてはいるが。

「なるほど……、みなさんにそんな能力があるとは知りませんでした。ところで、ここはどこなのでしょう？ もしかしてここが私達が探していた抜け道なのでは……」

マヤとナツメが落ちたことから偶然に下りてくることになった下層だが、あたりを通り抜けるティツピーの数明らかに多い。貴重な魔術の存在する「魔力溜まり」への抜け道の一番の探し方は、そこへ向かう大量のティツピーの流れをまず見つけることだった。そしてこの層のティツピーは、近くにある木の洞の中に流れ込んでいる。もしかしたら洞を通り抜けた先に求めるものがあるのでは？ チノは

興奮を抑えきれず、ふらふらと洞の方に向かってみたが、その時――

「あぶない!! ちの!!」

「うわあああ!!?」

ドオオン! 大きな岩が突然さつきまでチノのいたところに落ちてきた。マヤの警告のおかげでギリギリのところまで回避できたが。何で突然岩が? 近くに落ちてきそうな岩なんてなかったはず。そう思いながら視線を上げると、宝石のような二つの巨大な目と目が合う。宝石のような目? いや、この目は本当に、宝石でできた目だ。宝石でできた目、岩で出来た顔、さらに大きな岩で出来た巨大な体。岩の巨人が、チノを見下ろしている。

「ゴーレムだあああああ!!」

チノを襲ったのは落石ではなくゴーレムの腕だった。魔力溜まりのある層には、それを守るために古代の魔術師によって配置された守護者――いわゆるフロアボスがいることがあるらしい。このゴーレムがそうなのだろう。チノはただの岩としか認識していなかったのだが、チノが近づいたことで反応し起動してしまったようだ。

「にげろおおおお!!」

マヤの一言を皮切りに、五人は蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。子供四人はちゃんと逃げ切れるのでしょうか!?と心配になるチノだったが、俊敏さと高い身体能力が特性の種族だけあって、チノよりもむしろ早足で先行していた。ドオン! ゴーレムの腕が追撃をかけてくる。チノも慌てて四人の後を追いついて、全力で走って逃げ始めた。

3章：私が私を見つめてました―⑥

「はあ、はあ、はあ……」

何とか逃げ切った五人は、ダンジョンの片隅の比較的安全な一角で息を整えていた。ゴーレムは重い岩で出来ているからか、動きがそこまで素早くなかったのは幸運だった。

フロアボスの存在を忘れてふらふらと洞の方に近づいたのは迂闊でした、落下事件があつた直後だというのに、また私の不注意でみなさんを危険な目に合わせてしまいました――、そう自分でも思っていたチノだが、マヤとナツメからもそれを指摘されてしまった。

「ちの、しっかりしてよー。ふろあぼすにはおいかけられるし、わたしたちの『しゅぞくとくせい』もしらないしきー。わたしたちのちからがいかせるようちやんとべんきようしないと、りーだーしつかくだよー。ちやんとかんがえてうごいてる?」

「ちの、あわてんぼさんだね!」

自分で分かっていることでも、他人から言われると急にイラつとすることがある。今のマヤの言葉がまさにそれだった。マヤが子供の姿のくせに一丁前な一言を放つたのも原因だったかもしれない。チノはやや言葉に険を含めてこう返した。

「マヤさん、そもそもこの状況に陥ったのが誰の所為だか分かって言ってるんですか……? マヤさんがトラップに引っ掛かったりしなければこんな苦勞をすることには……、いやそもそも私はこのクエストを受けることも反対でしたが、それを受けてみようって言ったのはマヤさんで……」

「このじょうきよう?」

マヤがきよとんとする。

(そうでした、子供化する前の記憶は無いっぽいんです……)

はあ、子供は気楽で良いですね、そう皮肉まじりに返しそうになって、誰かにじーっと見られていることに気付く。この視線は――

「ちのおねえちゃん、まやちゃん、けんかはやめて……」

「なかよくしてね!」

「メグさん!?! エルさん!?!」

メグ、エルの二人が、目を潤ませてこちらを見ている。

「ちのおねえちゃん、マヤちゃんをいじめないであげて……? わる
ぎがあるわけじゃないから……」

「べ、別にいじめていた訳では……」

メグのうるんだ瞳と二度目の「お姉ちゃん」呼びに心外ながらもく
らつときてしまう。女神ココアさんから能力を与えられた時にココ
アさんの一部が乗り移りでもしたのでしょうか?と思わず自分に苦
笑してしまった。

(でも、「お姉ちゃん」というのもあながち間違っていないですね。マヤ
さん、メグさんに比べて誕生日の遅い私は言ってみれば一番の年下で
したけれど、今のこの状況では私が「お姉ちゃん」な訳で)

考えてみれば四人は無邪気なふるまいをしてはいるものの、危険な
ダンジョンの奥でいきなり子供になってしまい、今までの記憶も失
い、不安に思っていない訳がないのだ。四人が元の姿に戻れるよう
なるまで、自分がお姉ちゃん、もといパーティーリーダーとして、しつ
かり四人をまとめていかなければならない。チノはマヤにきつく当
たったことを少し反省した。

冷静な頭になると、「私達の力を生かせるよう、考えて動け」という
マヤの言葉はこの状況を打開するヒントにもなるような気がしてき
ていた。さしあたってのチノ達の第一の目標は、フロアボスである
ゴーレムの撃破。チノは先ほどまでは、子供パーティーの戦力ではフロ
アボスの撃破は無理だと思っていたが、チノを押し倒した時のマヤの
力の強さ、落下した時の運動神経、ゴーレムから逃げるとき俊敏さ
などを見ると、意外にもパーティとしての戦力は侮れないのかもしれ
ない。ゴーレムは今では五人を追いかけのをやめて持ち場に戻り、元
のような動かない石塊と化している。ゴーレムが陣取っている洞の
入口の周囲は、上層へと伸びる枝が絡み合って切り立った崖のよう
になっているものに囲まれており高低差に富む地形となっている。こ
の条件で、四人の種族特性を生かしながら戦う方法は――

「マヤさん、メグさん、ナツメさん、エルさん……私達は必ずボスを倒

して、みなさんを元の姿に戻して、このクエストを成功させます。そのため、みなさんの力を貸してもらえませんか」

チノは決意に満ちた目でそう言った。その目には、さっきまで四人のお守りに追われてあたふたしていた時のような、戸惑いや迷いはもう無かった。

3章：私が私を見つめてました―⑦

魔力溜まりへと続く巨大な木の洞の前。古の時代から不正に魔力を得ようとする盗人を阻むために働き続けてきたゴーレムは、今は静かに眠っていた。その眠りを邪魔しようとする者が一人、姿を現す。

「こつちだよー…のーろまー!」

バキユン! マヤは遠くからの射撃で、ゴーレムを挑発する。ゴゴゴゴゴ、と音がして、ただの岩の塊に見えるゴーレムは、狙い通り起動し始めた。そして眠りを覚ましたのが何者なのかを認識すると、立ち上がってマヤの方を追いかけ始める。だが、チノの強化魔法で脚力を増しているマヤは追いつかれることはない。つかず離れず、ゴーレムの腕の一撃を食らわれない程度の距離を維持しながら、ゴーレムを一方へ誘導する。

「こんどはこつちだよ!」

ゴーレムが壁際まで来たところで、なんと壁の中から矢が射掛けられた。この壁は土の壁ではなく、世界樹の太い枝が複雑に絡まりあつて壁のようになっていているものである。ナツメ・エルの二人はその小さくなつた体を生かして枝の隙間に入り込み、外に向かってわずかに通じている隙間を使って矢を射掛けたのである。

予測しない場所からの攻撃に最初は戸惑っている様子のゴーレムだったが、やがて攻撃が「壁」の中からのものだど気付くと、「壁」の中にある攻撃者を捕まえるべく、枝の隙間にその巨大な手をつっ込もうとするが――

(よし!! 作戦通りです!!)

世界樹の枝は何らかの魔術的な加護を得ているのか、植物らしい弾力としなりを持つ一方で容易には破壊できない強度を兼ね備えている素材である。その太い枝が複雑に絡まりあつているところに無理に腕をつっ込もうとしたものだから、ゴーレムは腕を奥に進めることも引き抜くことも出来なくなり、腕の自由を封じられてしまった。ゴーレムの太い腕に対して世界樹の枝の壁は、中からの矢は通すが外の攻撃からは守る、天然のアロースリットのような役割を果たすので

はないか——、そう読んだ上でのチノの作戦だが、見事読みが当たったようだ。万一読みが外れてゴーレムの腕の一撃を食らってしまったとしても何とか耐えられるよう、防御力の高いナツメ・エルをこの役目に配置したのだが、最悪の事態にならなかったことに安堵する。

「今です!! メグさん!!」

攻撃手段である腕を封じられた岩の巨人は狩られるだけの獲物ではない。ゴーレムの高さよりもさらに高所の枝まで駆け上がり待機していたメグが、ゴーレムの頭に向けて落下しながら襲い掛かる。マヤ・ナツメの落下事件で分かったとおり、彼女らの種族はこの程度の高さであれば怪我をすることはない。メグが狙うのは、ゴーレムの頭に貼り付けられた羊皮紙に刻まれた魔術刻印ただ一つだ。銃弾も矢もあまり効いている様子のないゴーレムだが、伝承によれば、この魔術刻印を破壊することでただの死んだ土くれへと還るはずだ。

「がおおおおおおおお!!!」

メグの炎の斧が、ゴーレムの頭を貫いた。メグが着地してから数秒の間、沈黙の時間が流れた。そして、ちょうどメグが翼竜を倒した時と同じように、よろめいた後にゴーレムの体は崩壊し——、その体を構成していた土くれは、無数のティツピーへと姿を変え飛散していった。

「やりましたー!」

「いえーい!!!」

マヤとメグがハイタッチしているのが見える。ナツメとエルも枝の隙間から這い出してきた、笑顔で祝福している。だがその時、チノは異変を感じた——

「!?!?!
突風!」

ものすごい風がダンジョン内に吹いてきて、チノを押し流そうとする。いや正確には、先ほどまでゴーレムが守っていた木の洞がチノを吸い込もうとしているのだ。ゴーレムを倒したことにより発生した大量の行き場の無いティツピーも空気の流れと一緒に洞に吸い込まれていく。まるで洞の奥に潜む存在が意思を持ってチノもティツピーも吸い込もうかとしているかのように。

(こ、これが「世界中のティツピーの大動脈」ティツピーストリームに流れ込もうとするティツピーの流れ……!? いや、それにしても強すぎます……!!)

必死で踏ん張るチノだったが、あまりに激しすぎる風について立っていられなくなる。空中に浮いたチノの体はあつという間に吸い寄せられ、洞の奥の無明の闇が視界いっぱい広がる。

「チノーー!」

「チノちゃん!!」

意識を失う前に最後に聞いたのは、チノに必死に呼びかけようとするマヤ達の声だった。

3章：私が私を見つめてました―⑧

ぴちよん。

ぴちよん。

ぴちよん。

「ん……んう……」

世界樹の葉から滴り落ちる雫が額にあたり、その冷たさでチノは目を覚ます。

「ここは……どこなんでしょう？」

チノはあたりを見回す。そしてその美しい光景に息を飲んだ。

「ティツピー……ストリーム……」

ドーナツ状になっている世界樹の構造の中で「ドーナツの穴」の淵の部分にまで来てしまったらしい。「ドーナツの穴」を貫くのがティツピーストリーム、地面から空に向かうティツピーの太い流れであり、世界中の消滅したモンスターや死んだ人間の魂（と考えられているもの）が還った姿であるティツピーが再生するための大循環である。何万、何億のティツピーが集まり太い流れとなっているため、巨大な光の柱のように見える。元の世界での自分のおじいちゃんとお見が同じものが大量に集まっていると考えたとシユールだが、鬱蒼とした森のような暗さを持つ世界樹の中心を荘厳な光の柱が貫くさまは、「シユール」の一言では片付けられない異様な美しさを醸し出している。それに接する者は大河や瀑布のような大自然の驚異に対する畏怖と同等かそれ以上の感情を抱いてしまうほどに。

——もしも、ここを流れる光の粒のように見えるもの一つ一つが死んだ人間の魂なのだとするれば。この世界でも亡くなっているという、私のおじいちゃんやお母さんの魂も、ここを流れているのでしょうか？ そんなことをチノは考えた。

「目が覚めましたか」

「わわっ！」

急に話しかけられてチノは驚く。だが、話しかけてきたのが誰か確かめようとした瞬間、さらに驚き心臓が止まるかと思った。

チノに話しかけたのは、チノだった。信じられないが、チノに話しかけてきた少女の顔は、鏡でよく見る自分の顔と全く同じだ。

「なっ……なんですか、あなた、なんでいったい……」

「いきなりこの姿で現れたので驚かせてしまいましたか？ 今の私は霊体としての存在なので、本来は特定の肉体としての姿を持つことはないのですが、この姿が『私が誰なのか』を一番本質的に表しており、あなたにとっても直感的に理解しやすいだろうという配慮の結果、この姿を選びました。ですので、怒らないでくださいね」

「お、怒るといふか……」

とにかくびっくりしている。この世界に自分が二人いるなんてことがあり得るのだろうか。それとも、このファンタジーな世界ではよくある出来事なのだろうか。あるいは、全くの他人の空似なのか。確かめるためチノは質問する。

「あ、あなたは誰なんですか……？」

「おっと、名前を名乗らず失礼しました。私はチノです。喫茶店『ラビットハウス』のマスターの孫です。ただし、あなたのいた『元の世界』ではなく、この世界での、という意味ですが」

意味が分からない。目を白黒させていると、「チノ」が説明を加える。

「あなたはこの世界に召喚された当時、こんなことを考えていたのでありませんか？ ……この世界では私が召喚される以前に別の『私』が存在していたことになる。もう一人の『私』は、いったいどこに消えてしまったのだろうか？ と。その消えてしまった『私』、あなたの魂がこの世界に召喚される前にその体を使っていた魂が私です。あなたが来たことで自分の体から追い出されてしまったので、今は霊体ライフを満喫しています」

霊体ライフを満喫って、そんな軽いノリで良いのだろうか。自分の体を追い出されるって、とんでもない出来事のように思えるが――

「あ、あの、あなたを追い出してしまったみたいで、本当にすみません。それだったら私お邪魔のようなので、もう元の世界に帰って、この体はお返ししたほうが……？」

「それが出来るのであればお互いとつくにそうしているでしょう。女神ココアと言いましたか、彼女の言った台詞『魔王を倒すまで元の世界に帰れない』というのは、紛れもなくそのとおりなのです。はあ。とんでもないことをしてくれたものです」

その時、ティツピーストリームの流れが一瞬弱くなり、あたりの光量が減った。すると世界樹の木陰の暗がりの中でもう一人のチノの体は淡い光を放っていることが分かった。これが霊体の特徴なのかもしれない。今まで周辺が明るかったのと、もう一人のチノという存在のあまりのビジュアル的インパクトに負けて気付かなかったが。

ところで、今の言い方だとこの世界のチノはココアを知らないのだろうか。だとするとチノを召喚した女神ココアとはいったい何者なのか。そこを聞こうかと思ったが「この世界のチノ」がさらに話を続けるので遮られてしまった。

3章：私が私を見つめてました―⑨

「霊体になった私は、あなたを元の世界に送り返す方法を知るため、私
が自分の体に戻る方法を知るため、自由に動き回れる特権を利用して
色々などころに行ったり調べまわっていました。まず、謎だった魔王
の居城を突き止めました。あと魔王を倒す伝説の召喚魔法も習得す
ることが出来ました」

「す、すごいです……」

「この魔法は魔王にだけ特攻効果を有する『ある存在』を召喚できるそ
うです。一回しか使えないそうなので何が召喚されるのか試すわけ
にはいきませんが、これで魔王討伐に大きく近づいたのは間違いない
でしょう」

チノがはるばる時間をかけて世界樹まで来て探していた召喚魔法
を既に習得済だという。異世界の「私」は強かった。もうこれ「私」一
人で良いのでは——そんなことを思っている、ぐいっと「私」が近
づいてきた。「私」の姿を至近距離で見ることになり、とても気恥ずか
しい気分になる。思わず目をそらす、どうしても「私」の姿をチラ
チラ見てしまい話に集中できない。

「ですが、霊体は世界との繋がりが薄い状態ですので、世界の魔力を十
分に引き出すことができず、全力で魔法を使うことが出来ません。な
のでせっかく魔法を習得しても体に戻れなければ意味がないんです。
そこで、私が私の体に戻る方法についても古い文献などから調べてみ
ましたが、これはよく分かりませんでした。平行世界にいる同一人物
を召喚する、なんて魔法は歴史の中でも使用された前例があまりあり
ません。元いた魂が追い出されたなんて事例となるとさらに少ない
です。どうやら、召喚された側の魂と、元いた魂の『差異』があるレ
ベル以上に達すると、魂を融合することが出来ず、そういうことが起
こるらしいということまでは突き止めたのですが……」

「魂の差異……?」

「私」の話はどんどん飛躍していくのでついて行くのが難しいが、なん
とかついていく。召喚された側の魂と元いた魂の差異、と「私」は言っ

た。つまり、私と異世界の私、見た目は一緒でも中身は違うとかそういうことなのだろうか。

「そうです。魂です。同じ私であっても、育ってきた環境や交流してきた人たちの違いなどで、考え方や行動原理に差が生じているのです。二つに分かれた分かれ道がどこかで一つに繋がるように、また一緒に魂を持つようになることもあるようですが……少なくとも今の私とあなたは、道同士が離れている状態だということですね」

どこかで聞いたようなたとえ話のおかげで少しは分かったような気がするが——、そうだとして、結局どうすれば良いのだろう。環境によって考え方が違うことが原因で体に戻れないのであれば、もはやどうしようもないような気もするが。

「ここ数日は、姿を見えないようにすることが出来るという霊体の特性を生かして、あなたのことをこっそり観察させてもらっています。私とあなたで離れている『道』が何なのかを見極めさせてもらうために」

「そ、そんなことしてたんですか!?!」

今のこのシチュエーションも相当気恥ずかしいものがあるが、「私」が私を見つめていたかと思うと、それは別の意味で恥ずかしいものがある。

「とりあえず、マヤさんに自分のおっぱいを吸わせるのはやめた方が良いと思いますが……」

「わーっ!! わーっ!! ちが、違うんです、それは誤解です!!」

「ふふっ、冗談ですよ。そんなに慌てている自分を見るのは、ちよつと面白いです」

自分にからかわれてしまった。あのシーンを見られていたとは、顔から火が出そうになる。

「本当に見させてもらっていたのは、あなたがこの世界でどんな行動を取り、どんな考え方をするか、それが私とどれほどに違うのかという点です。……ずばり聞きたいのですが、あなたは降霊術、欲しくはないのでですか? 世界樹のクエストを受注するのにも最初反対してましたし、どうもあなたはそこまで積極的に欲しがっていないように

見えます。私にとっては、亡くなったお母さんやおじいちゃん、なんとしてももう一度会いたいですし、喉から手が出るほど欲しいです」もしあなたが欲するのであれば、どこにあるのか場所を教えることも出来ませんが、とも付け加える。さて、どう答えるか。

もう一人のチノの瞳がまっすぐチノを射抜く。クエストの成功報酬のことを考えるのであれば、「私も欲しいですぜひ教えてください」と言うべきなのだろうが、チノは文字通り「自分で自分に嘘をつくことはできない」ことを直感していた。チノは、ところどころ詰まったりつつかえたりしながらも、ゆっくりと語り始めた。

3章：私が私を見つめてました―⑩

「もちろん、お母さんやおじいちゃんに会いたくないかと言うと嘘になりますけど……ですが、不思議ですね。最近の私は、亡くなったはずのおじいちゃんやお母さん、私のすぐそばにいるような気がしているんです」

祖父の魂がティッピーに乗り移ったという出来事を別にしても、の話である。

「こちらの世界のあなたはたぶん知らないと思いますが、元いた世界で私、不思議な人と出会ったんです。私より年は上で、やたらとお姉ちゃんぶってきたりするんですが、その割には全然頼りないようなところがあつて……。でもその人のおかげで、私は色んなことを知れたり、色んな人と出会えたりしたんです。みんなでお泊り会をしたり、初めて生まれた街から出ることになるきっかけを作ってくれたり。この世界に来る直前も、友達みんな卒業旅行に来ていたのですが、その人と出会うことがなかったらそんなことはしていなかったと思います。で、その人が私を色んなものに出会わせたり連れて行ったりしてくれるの、まるでおじいちゃんやお母さんが亡くなる前に私にしてくれていたことみたいだな、つてちよつと思ったりするんです。人は、亡くなつても永遠にいなくなってしまうのではなく、誰かの中に移動するだけなのかもしれないって。そういうえば、ちよつとびっくりするような事があつたんですよ。ハロウィンと言うお祭りがあるのですが、そのお祭りで、母が得意だった手品をその人が披露してくれたことがあつて……」

そこまで喋つたところで、自分が一方的に喋っていることにハッと気づき、チノはちよつと恥ずかしくなった。

「と、とにかく！ 私が言いたかつたのは、魔法に頼らなくても、本当の魔法みたいな出来事を起こしてしまう人はいるということなんです。わ、分かりますか……？」

果たしてこれで答えになっているんでしょうか。一方的に自分の話したいことだけ話してしまったような気がします——、おそろお

そる、もう一人の「私」の顔をうかがう。

「ふふっ。あなたは本当にその人のことが好きなんですね」

「しゅ、しゅき!? ベ、ベベ別にそういうのでは」

「ふむ……私とあなたが違う理由、何となくですが分かったような気がします。理解するということは、お互いの差を埋めるための第一歩です。そしてここ世界樹は、魂が生まれたままの姿にもっとも近く場所……、この場所であれば、私と『私』の魂の融合、成功するかもしれません」

「? 成功するかもって……」

そう言うと、もう一人の「私」はぐいつとさらに距離を縮めて来て

「!??! ん、んんーっ!!」

何と、「私」が私にキスをした。いったい何をするんですか?! と慌てる。だが、確かに唇が重なっているはずなのに、自分の唇には何の感触も感じない。相手が霊体だからだろうか? 混乱するチノの視界には、さらにびっくりするような光景が広がった。チノにキスしている「私」の姿がどんどん薄くなって透けていく。ものの十五秒ほどで、もう一人の「私」の姿は完全に消えてなくなってしまった。もう一人の「私」の姿が消えると同時に、自分の体が熱くなり、全身に力が満ち満ちてくるのを感じるようになった。かなり魔力も上がっているような感じもある。これがもう一人の「私」の力なのだろうか。(どうやら成功したみたいです。私と「私」の融合が……これであたかも、伝説の召喚魔法を使えるようになったはず。この力をうまく使って魔王を倒して、元の世界に帰り、「その人」に会いにいつてあげてくださいね……)

今度は頭の中からもう一人の「私」の聲がするのを感じた。何とも妙な気分だ。声はさらにこう続ける。

(ちなみに降霊術のことですが、ごめんなさい、嘘をつきました。どこにあるのか場所を教えることが出来るというのは嘘です。あれはきつと噂だけでこの世界に存在はしないものなのでしょう。少なくとも、この近くには無いことを調べました。なので、このダンジョン

からは撤退して魔王退治に向かったほうが良いと思いますよ。ふああ……ちよつと喋りすぎたのか疲れましたね。では私はあなたが元の世界に戻るまでの間ひと休みしますので、後のことはよろしく願います。ぐう……)

「つてちよつちよつ！ 寝ちやうんですか!? 何かこう魔王を倒すためにさらにアドバイスのなものとか……」

だが、それ以降はどれだけ頭の中の「私」に呼びかけても反応することは無かった。確かにそこに「私」がいるという感触はあるのだが。

遠く離れた異世界で出会ったもう一人の私との対話。時間にするとほんの数分の出来事だが、いったいこれは何だったんだろう。この経験を自分の中で出来事として整理するには、まだ時間がかかるような気がした。中でも一番の謎だったのは――

「で、結局なんでもう一人の『私』は、バニーガールの姿をしてたんですか!？」

そう、もう一人の「私」はどういう訳か、神殿で着せられた「遊び人」の衣装のようなバニーガール姿をしていたのだった。自分自身のコスプレしている姿、それもほとんど半裸のような姿をじっくり見せ付けられるのは、とにかく気恥ずかしくて仕方が無かった。もう一人の「私」がどどん話を進めていくのでツッコミを入れる暇が無かったが、よく冷静になって会話を成立させていたと自分を褒めてあげたい。

まさか、もう一人の「私」は、好んでそういう格好をするようなエッチな趣味があるのでは――？ そんなことまで思ってしまう。だがもう一人の「私」は、この姿が「私のことを一番本質的に表している姿」だと言っていた。バニーガールのどこが私のことを本質的に表しているというのか、本気で分からない。思わず他の問題を差し置いて真剣に考え込んでしまうチノだった。

3章：私が私を見つめてました―⑪

「あーっ！ チノみつけ！ おーい、突然洞の中に吸い込まれてたけど生きてるかー！ 心配したんだぞー！」

「チノちゃん大丈夫ー？ 頭とか体とかどこか打ってない？」

しばらくはその場で考え込んでいたのだが、程なくしてマヤとメグがチノを見つけてくれた。ナツメとエルもその後ろにいる。

四人とも、さつきまでの小さくなった姿ではなく元の姿に戻っていた。いわく、ゴーレムを倒した後ちよつとして元の姿に戻ることが出来たのだという。チノは四人の呪いについて、時間経過で解けるか、ダンジョンのフロアのボスを倒すかのどちらかで解けると推測していたが、どうやら後者だったということらしい。

チノは、もう一人のチノと出会ったことと会話の内容についてかいつまんで話した（もちろん、もう一人のチノがバニーガール姿だった点は伏せて。今考えると、バニーガール姿をマヤ達に目撃されなくて本当に良かったと思う）。最初は半信半疑な反応を示されたが、現にチノの魔力や各種ステータスが洞の中に入る前より大幅に上がっている事実を確かめると、話を信じてくれた。

もう一人のチノから言われた、このダンジョンには降霊術は無いので早く脱出すべき、という意見についてもあっさりを受け入れてくれた。これについては、チノがもう一人のチノと会話していた場所には（チノはそれどころではなかったので気付かなかったのだが）たくさんの金銀財宝の入った宝箱があり、クエストの成功報酬を当てにしないで良いほどの報酬を確保できたからという理由もあったかもしれない。

とにかくそういう訳で、脱出アイテムを使って世界樹から脱出し、街へと撤収することが慌しく決まった。ナツメとエルの姉妹とは街への帰りの馬車の中でもっとじっくりと話をしてみたかったのだが、「じゃあ、私達は次のクエストがあるから別の街に向かうから」というナツメの一言であっさりとお別れになってしまった。二人は何で旅をしているのか？——その理由を聞いてみたかったのだが、今は仕方

ない。無事に元の世界に帰れたら、元の世界の二人にそれは聞いてみる機会があるかもしれない。そう思っただけで自分を納得させるチノだった。

姉妹と別れたので帰りの馬車は三人きりだった。世界樹から街までは馬車に乗っても丸一日以上かかる長い道のりだ。それでも行きはまだみんな元気があったので、まるで卒業旅行の行きの電車のようなわいわいした旅だったのだが、流石に帰りは三人とも疲れているのか口数が少なくなる。ようやく道のりの四分の一ほどまで来た頃、蹄の音だけが響きわたる静かな馬車の中で、マヤがポツンとこう言った。

「チノ、ごめんな。私が小さい姿になってる間にチノにしちゃったこと……」

「？ ああ、いえ、良いんですよ。マヤさんに言われたとおり、私が勉強不足だったのも、頼りないリーダーだったのも事実です。あの一言を言われたおかげで私も目が覚めましたし、アドバイスのおかげで何とか無事にゴーレムを倒すことが出来ました。全然気にしてませんし、むしろ感謝しています」

「いや、それもあるんだけどそうじゃなくて、こう、チノの、……お、お、おっぱいを吸っちゃったこと」

「!??!?!」

「げふっ！ ぐふっ！」

真っ赤になりながらマヤがそう言うと、チノはむせ返り、メグは真っ白になってフリーズしてしまった。

「あの姿になると判断力が低くなるとはいえ、本当にごめん。やっぱりチノも最初におっぱいを吸われるのは好きな人が良かったよね？ 私はいわばチノのファーストおっぱいキスを奪ってしまったことになる訳で、謝って許されるものではないとは分かっているけど……」

「ななななななんですかファーストおっぱいキスってそんな言葉あるんですか？ ベベ

ベベ別におっぱいを吸われたこととか全くこれっぽっちも気にし

ていないというかマヤさんは好きか嫌いかでいうともちろん好きな人なのでおっぱいを吸われても何の問題もないといえますか」

チノは混乱してもはや自分で言っていることが分からなくなっている。

「わ、私が知らないところでチノちゃんとマヤちゃんがいつの間にか大人への階段を上ってるー!?!」

ようやくフリーズ状態から復帰したメグの叫び声が馬車の中にごだました。この後街に戻るまでの丸一日近い旅程の間、馬車の中の空気はとても気まずいものだった——と後にメグは語っている。

4章：魔王城攻略完了（みっしよんこんぷりーと）――

①

夢の終わりと言うのはいつも突然に訪れるものだと思っていた。チノの異世界での冒険も、もしもこれが夢なのだとしたら、「チノの冒険はこれからも続く！」とか打ち切り漫画じみた終わり方をして、後は突然目が覚めて元の世界に戻ってくるとか、そういう終わり方をするのではないかと内心期待していた。

だがそうはならなかったことを思うと、これはやはり夢ではないのかもしれない。何しろチノの冒険は打ち切りエンドではなく、真のエンディング、つまり魔王との対峙の局面を今まさに迎えようとしているのだ。

「いよいよですね。マヤさん、メグさん、準備は大丈夫ですか？」

「もっちらん！」

バニーガール姿のチノに教えてもらったとおりの場所にあった魔王の居城。チマメ隊の三人は、その最奥にある魔王の部屋の扉を開く。

「たのもーっ！」

「お、お邪魔します」

「いやいやマヤさん、メグさん、その第一声はどちらもおかしくないですか!？」

いまいち気合の入りきららないテンションのまま魔王の部屋に踏み込むと、遠くに見える玉座に人影のようなものが見える。あれが魔王なのだろう。

「ふっふっふ……よく来た、無謀なる勇者どもよ……。いずれ劣らぬ一騎当千の武者揃いの我が配下を蹴散らしてここまで来ることができた実力と勇氣、それだけは褒めてやろう……。だが、貴様らの命運も今日この時をもって尽きるのだ。この闇の支配者たる我、魔王様の手によってな……」

魔王の声が部屋中に響きわたる。言っている内容こそ何となく魔

王っぽいが、声質がそこまで恐ろしげではないので、こちらもいまいち気合が入りきらない。もっと老人のような威厳のある声をイメージしていたが、どちらかという少年のような、いやむしろ少女が無理やりに威厳を出そうとしている声のように聞こえる。かん高い地声を持つ少女がわざと低い声を作っているようなこの声、どこかで聞き覚えがあるような――

「ってココアさん！ その声はココアさんじゃないですか！」

そうだ。チノには分かる。この声は間違いなくココアがちよつと無理をして作っている声だ。

「ばれてしまつては仕方がないね……じゃあここからは素で行かせてもらうよ！」

魔王が鎧と仮面を脱ぎ捨てると、あらわになつたのはよく見慣れた顔、紛れも無くココアの姿だった。黒を基調としたマントつきの服は「怪盗ラパン」の衣装を少し思わせるところがあるが、下に着ているのは黒いボンテージのような衣装である。イヤリングなど装飾品も髑髏をあしらつたデザインのもが多く、闇の支配者であることを精一杯アピールしているのだろう。だが今ひとつ大人っぽさやセクシ―さを出し切れておらず、女神ココアの姿を目にした時と同じような、コスプレっぽい、中身が伴わないような印象を受ける。

「ココアってどういうこと！ チノの知り合い!? というか、チノを召喚したつていう女神と同じ名前じゃん！」

「魔王を倒すためにチノちゃんを召喚したつていう女神さまと魔王が同一人物……マッチポンプかなー？」

「ココアさん……いったいどういうことなのか説明してもらえますか？ 何で魔王がココアさんなのか、私をこの世界に召喚した存在とどういう関係なのか……」

「ふっふっふ……教えてあげよう。でもそれは、私の可愛い配下達を倒せたら、だけれどもね！」

そういつてココアが口の中で何事かをぶつぶつと唱えると、何も無い空間から光を発し、何者達かが突然広間の中央に出現する。

「……誰が配下達なのよ。私はココアの配下になつたつもりなんか一

度も無いんだけれど」

「今度の相手は誰だ!? 誰が相手だろうとやっつけてやるぞ!」

「て、転移空間に隠れてる間に、あ、足つつちやった……」

三人の少女が広間に降り立つ(約一名、緑色の衣装の少女はちゃんと着地でできずに崩れ落ちてしまい、他の二名、黄色と紫色の少女に介抱されている)。三人は、マヤ達が世界樹でなってしまった小人種族のような背格好をしている。話し方や内容を聞く限りは、マヤ達のような幼稚化はしていないようだ。確認するまでもない。この三人は、チノもよく知っている――

「シャロさん、リゼさん、千夜さん! どうしてここに!? というか、ココアさんの配下になっただんですか?」

「チ、チノちゃん!? チノちゃんもこの世界に召喚されたの!? というか配下になつてないわよ! 私達はただ魔王とか名乗ってるココアに召喚されただけ!」

「魔王のココアさんに召喚……ということは、シャロさん達も『元の世界』から来て、えっでも、私は女神のココアさんに召喚されて……いったいどういうことですか?」

「ふっふっふ……それは私から説明しよう!」

(ココアさん、配下を倒すまで教えないって言ったのに結局説明しちやうんだ……)

4章：魔王城攻略完了（みっしよんこんぷりーと）――

②

ココアの説明をかいつまむとこういうことになる。

チノ達との卒業旅行中のある朝のこと、目覚めるとココアは見知らぬ異世界に転移しており、魔王になっていた。最初は混乱したが、持ち前の適応力の高さで、魔王としての基礎ステータスの高さを生かしてそれなりに異世界生活を楽しんでいた。ある日、自分の使える魔法のリストに召喚魔法があることに気付いたココアは、シャロ・リゼ・千夜の三人を元の世界から召喚することにした。三人はなぜか小人種族の姿になってしまいはしたものの、召喚自体は成功し、四人での異世界生活が始まった。ココアは魔王と言う立場ではあつたが、悪事をはたらくことには興味がないので、人里離れたところに難易度の高いダンジョンを作って遊んでみたり、わざわざそのダンジョンまで遠征してくるハイレベル冒険者に時々力比べを挑んでみたりして、まるでゲームのようにこの世界をエンジョイしていた。

一方で、この状況を快く思わない者がいた。ココアがこの世界にやってきたことよって自分の体から追い出されてしまった「元からこの世界にいたココア」である。「もう一人のココア」は、霊体化してさまよいながらも、本来霊体では使えない召喚魔法を使う方法を発見した。そこで、ココアが次に召喚しそうな人物――チノを、先回りして召喚し、自分の味方につけることにしたのだ。そう、女神ココアの正体は、この「霊体化したもう一人のココア」だったのである。ココアを倒し、元の世界に帰すまでは自分の体に帰ることはできない――そう思った女神ココアは、「魔王を倒すまで」という条件付きでチノを召喚することにした。召喚自体は成功したが、依り代を木つ端微塵にされてしまい、女神ココア存在は大気中の魔力へと雲散霧消してしまったのはチノもよく知っているとおりである。本来はマヤとメグもチノの次に召喚しようと女神ココアは企んでいたらしい。

「まあ、散り散りになった女神ココアの成分は99パーセントくらい

は大気中から何とか回収して、今は私の体の中で眠っているんだけどね。いやー、本当に世話の焼ける私だよー」

「えっココアさんがそれを言います?」

「とにかく、今日チノちゃんたちがここに来てくれたおかげで無事に私の妹たちが全員揃って、ココアお姉ちゃんは嬉しいのです! 今日には宴会だよ! チノちゃん達もせっかくだから私の仲間になって一緒に遊ぼうよ!」

「いや、遊ぼうって……私はココアさんを倒しに来たのですが」

「えー、せっかくの異世界だからチノちゃんとも一緒に遊びたいのに……、一緒に遊んでくれたら、今なら世界の全部をプレゼントだよ!」

「いやいや、そんな古典的な手には引っ掛からな……って全部!? 全部あげちゃうんですか!?!」

「世界の全部? タダで貰えるなら貰っておこうかなー」

「凄く気前の良いお姉さんだねー」

マヤとメグまでもが話に割って入ってきてさらにややこしいことになる。普通そこは「世界の半分をやろう」と言うところではないだろうか。

「えー、だって世界とか持つってもあんまり使い道ないしなあ……私は家族と、チノちゃん達と、いつものみんなと仲良く過ごせる日常があればそれでいいかな」

ココアさんにしては珍しく良いことを言う——と一瞬感心しかけたチノだったが、この世界でのココアさんは魔王。元の世界での「いつものみんなと仲良く過ごせる日常」に戻るためには、やっぱりココアさんを倒さなければならぬのだ。

「ココアさん、もうこの世界で十分遊んだでしょう……元の世界に戻りますよ。私と戦ってください」

「ふむ……どうあつても戦いは避けられないんだね。分かったよ、この魔王ココア、受けて立っつ!」

そう言ったココアの合図とともに、シャロ・リゼ・千夜の三人も戦闘体勢に入る。入ろうとするが——

「ぐ……ぐふっ! ……ここで私が倒れても、必ずや第二・第三の千夜が現

れて勇者を苦しめるだろう……!」

「千夜! しつかりしろ! 傷は浅いぞ!」

「千夜! 回復魔法使ってあげたじゃない! なんでまた倒れそうになってるのよ!」

「ち、千夜さん大丈夫ですか?! 瀕死どころか既に負けた後みたいな台詞を言ってますが……」

千夜は着地に失敗した時のダメージが抜けきっていないのか、いまだフラフラの状態だった。敵であるはずのチノにも思わず心配されてしまう。このまま戦い始めて良いものか、迷っているチノの耳元にマヤが囁きかける。

「チノ、あいつ弱そうなふりして油断させようとしてるけど、もしかしたら凄く厄介な能力を持っていたりするのかもしれない。惑わされずに一撃必殺で行った方が良いよ」

「いやあれはたぶん演技ではないと思いますが……」

「そうだとしても、だよ。今の私たちは三人、相手は魔王を入れて四人。数的に不利な状況で長期戦だといずれは追い詰められる。早く伝説の召喚魔法を使うんだ!」

伝説の召喚魔法を使うんだったら早いほうが良い、というマヤのアドバイスには一理あるかもしれない。チノは杖を握り締めた。千夜には悪いが、開幕で使わせてもらうことにする。

「では、魔王に特別な効果のある『存在』を召喚できるとい魔法、使わせてもらいます……カフエラテ、カフエモカ、カプチーノ!!!」

4章：魔王城攻略完了（みっしよんこんぷりーと）――

③

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!

「うわあああああ!!!」

「何!? 何が起ころのー!?!」

詠唱とともに、世界が反転したような錯覚に陥る。めちやくちやな地面の揺れとすさまじい光。いったいこれからどんな存在が召喚されるというのだろうか。ひよつとして、「魔王すらも従える最強の闇の支配者」的な、召喚してはいけない系の存在を召喚してしまったのでは？ チノは青ざめるが、呼んでしまった以上はもはや止められるものではないことも理解していた。だが、ようやく揺れと光がやみ、目を開けられる状態になった時、チノの目の前に立っていたのは、あまりに意外な人物だった――

「モ、モカさん!?!」

「お、お姉ちゃん!?!」

魔王城の広間に降り立ったのは、チノもココアもよく知る人物――ココアの姉、モカだった。魔王やソーサラーなど、ファンタジーっぽい衣装を着ているココアやチノ達と違って、元の世界から着の身着のままに来たかのような普段着を着ている。頭には緑の三角巾までつけていて、ホット・ベーカーリーのキッチンに立ったまま異世界召喚されたのではないかと思うような出で立ちだ。

「ココアー! 話は聞かせてもらったわよ! 駄目じゃない、チノちゃん放っておいて遊んでたら……。とうかなーに? その格好? コスプレ?」

「おおおおお姉ちゃん!! この格好は、つまりその、えーつとその……」

（ココアさん、真っ赤になってます……。流石のココアさんでも、ほとんど裸みたいな魔王衣装を家族に見られるのは恥ずかしいです）
「こんな寒そうな部屋でそんなお腹の出る格好してたら冷えちゃうわ

よ？　というか食事とかはちゃんと食べてるの？　自炊は出来るの？　異世界の水が合わなくてお腹壊したりはしてない？　ラビットハウスさんにお世話になってるときは毎食ご飯出てるから心配しなかつたけど、異世界だと食材とか調達できるところも少なそうだし心配で……」

「そ、そんなに心配しなくたって平気だつて！」

ココアはモカに質問攻めにされてたじたじになっている。先ほどまで魔王としてあれほどフリーダムに振舞っていたのと同じ人物とは思えないほどの変化だ。

（魔王に特攻効果のある「ある存在」を召喚する魔法……確かに言われてみれば当たっているのかもしれない。ココアさんにとつてモカさんはお姉ちゃんであるとともに弱点的存在……、この状況でココアさんに言うことを聞かせられるのはモカさんだけかも）

「で、ココアは何でそもそもこの世界に来たの？」

「そ、それは私も分からないよ!?　私だつて目覚めたらいつの間にかこの世界に転移してただけだし……でもせつかく来たからには、遊んでいかなないと損だなーつて思つて」

「遊ぶのも大事だけど、元の世界でココアが戻ってくるの、みんな待つてるわよ？　チノちゃんなんかはるばる迎えに来ちゃつたみたいだし……。遊びたければ、卒業旅行終わった後にでもまた実家に戻つてきなさい？　お母さんも待つてるし、私も昔みたいに遊んであげる！」

ココアの行きたいところどこへでも連れて行くわよ？　こつちに来る暇がなければ、また私からそつちに行つてもいいし。お姉ちゃんに、任せなさい？」

「ええっ本当!?　お姉ちゃん遊んでくれるの!?　わーい……つていやいや、私だつてお姉ちゃんだから、遊んでもらわなくなつて大丈夫だよ！　でも、逆にお姉ちゃんが私と遊びたいっていうなら、一緒に遊んであげなくもないというか」

「はいはい、じゃあそういうことでもいいから……」

「つてちよつちよつちよつ、待つてください、何ですか、またすぐく地面が揺れてませんか!？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

ココアとモカの会話が終わるか終わらないかくらいの時から、モカが召喚された時と同じような揺れが再び起こっていた。まるでさっきのシーンを巻き戻し再生するかのようになり、すさまじい光もあふれはじめた。

普通は地震が起こっている真つ最中に眠くなるなんてことはあり得ないが、異常なことに、光に包まれると急激にチノは眠気に襲われた。頭の芯から麻痺するような異常な眠気だ。これはもしかして、チノがこつちの世界に来る前の夜に感じた「誰かが強制的にチノの意識を飛ばそうとしているかのよう」と思ったあの眠気と同じなのでは。ちやんと思考することが出来たのはそこままで、そこから先は立っていることすらできず床に崩れ落ちる。意識が飛ばうとする直前に、ココア、千夜、シャロ、リゼも同じように膝をついているのを目の端で見る事が出来たが、それがチノがこの異世界で見た最後の光景になった。

夢の終わりが訪れるのは、やはりいつも突然のことなのかもしれない。

④ 4章：魔王城攻略完了（みっしよんこんぷりーと）――

揺れがおさまった直後の魔王の部屋で、マヤとメグは立ち尽くしていた。

「魔王を……倒せた、のかな？」

マヤとメグからすると、この部屋に入ってからのは意味が分からないことばかりだった。「ココア」とか名乗った魔王とはチノは知り合いだったように見えた。魔王が配下を召喚したが、その配下ともチノは知り合いだったように見えた。その後しばらく、魔王とチノの間で意味の分からない会話が繰り広げられ、結局魔王とチノ達とは戦うことになったようだった。戦闘では開幕で召喚魔法を使い凄い揺れが起こったが、召喚されてきたのは、ちよつと見慣れない服を着てはいるがどう見ても普通のお姉さんという感じの人だった。だが、そのお姉さんと魔王とが会話をしている時、また物凄い揺れが起こり、今度はチノと魔王、魔王の配下達みなバタバタと倒れてしまったのだ（召喚されたお姉さんはいつの間にかどこかに消えてしまった）。

「そうだ！ チノ！ 大丈夫か！ いきなり意識を失ったように見えただけど……」

「チノちゃん、頭とか打ってない!？」

「う、うーん……私の意識が目覚めた、ということとは……『もう一人の私』は、無事魔王を倒すことに成功したということですね。いや正確には、『あつちの世界』の魔王に対応する存在を送り返し、自らも『あつちの世界』に帰った、というところでしょうか」

「チ、チノ、本当に大丈夫!？」

目覚めたかと思うとチノがいきなりぶつぶつと意味不明な独り言のようなものを言うので、また幻覚魔法にでもかかってしまったのではないかと心配になる。

「大丈夫ですよ、私は。マヤさんとメグさんがよく知っている、いつも

のチノです」

そう言つて微笑みかけるチノの笑顔、よく見ないと笑つてることにすら気付かない程度の微かな笑顔は、冒険者学校時代に見慣れたチノの笑顔と全く同じものだったので、ようやくマヤとメグはほっとすることが出来た。

「そうすると問題なのは、こつちの世界の魔王ですか。人里離れたところで暮らしてくれている限りは、共存可能な存在だとは思いますが……」

そう言いながらチノは倒れている魔王の方へ近づいていくので、マヤとメグは慌てた。魔王は見た目は非力な少女のようだが、死んだという訳ではなさそうだし、何か危害を加えてくることがないとは言い切れない。チノが襲われそうになつたらすぐ反応できるよう、マヤは銃を、メグは斧を構える。その時、魔王が伸びをするような動きをして目覚めた。魔王の配下達も、徐々に目覚めつつあるようだ。

「う、うーん……ここはどこかな？ あつここは私の部屋……つてことはもう一人の私、無事に元の世界に帰れたんだ！ 良かった。と
いうことは、あなたはこの世界のチノちゃん……改めまして、初めまして、になるのかな？」

そう言いながら魔王がチノの方にふらふらと近づいてくるので、マヤ（メグ）は銃（斧）をすぐ放てる（振れる）ように握り直す。いったい何をするつもりなのか。チノを含め三人とも警戒度を上げるが、魔王はそれに全く気付かないかのようにのんきな口調で話し続ける。「うーん、もう一人の私から色々話を聞いてはいたけど、こうやって改めて見ると本当にチノちゃんって可愛いんだね！ もう一人の私が、『あつちの世界では可愛い妹がいて』とか凄くのろけてくるから、ちよつと悔しくなつて先回りして召喚しちゃったりもしたんだけど……。でもこんな妹がいたらのろけたくなる気持ちは分かるかなー。これからよろしくね！ チノちゃん。で、お近づきの印と言つたら何だけど……ちよつと『もふもふ』させてもらつても良いかな？ もう一人の私が、チノちゃんもふもふなんだよ！ って言つてたから、気になつちやつて……」

三人ともぽかんとする。初対面なのに何ていきなり距離感の近い魔王だろう——魔王らしい威厳もへつたくれもない。チノは思わず、心の中でこう呟いてしまった。

(何だ、この魔王……)

エピソード

「んう、すう……、んんん、ふわあああ〜」

大あくびをしながら、チノは目覚める。いつの間にか眠ってしまったみたいですが、とぼんやり考えながら、はつと気付く。そうだ、自分は今、魔王城にいたのでは!? モカさんとココアさんとお話しているうちに、突然光に包まれて——戦いの行方はどうなったんでしよう!? 慌てて周りの状況を確認するが、チノがいるのはどう見ても魔王城の硬い床の上ではなく、柔らかいベッドの上。ホテル「ロイヤル・キャッツ」のベッドの上だった。

「戻ってきた……?」

魔王を倒して、異世界から無事に戻ってくることに成功したということなのだろうか。スマホで時間を確認すると、時刻は朝、日付もゲームセンターに遊びに行った日の翌日のものだ。異世界では何日も冒険していたがこちらの世界の時間の流れでは一晩の出来事ではなかったということなのかもしれない。だが同時に、異世界で冒険していた時の記憶が、自分の中で急速にあやふやになって行くのを感じる。ちやうど、夢から覚めた途端にそれまで見ていた夢の内容を急速に忘れていくように。あの大冒険は夢の中の出来事だったのだろうか? 魔法が使える異世界なんて夢でしかあり得ない、と思う気持ちと、夢にしては変なリアリティがあったような、という気持ちが出た時に湧き起こる。

そうだ、ココアさんはどうしてるんだろう、あの魔王城の会話だと、ココアさんもある朝突然に異世界に転移してきたようなことを言っていましたか——と違って隣のベッドを見るが、ベッドはもぬけの殻だった。

どこにいるのだろう。もしかしたらパンの仕込みのために早起きしてるのかもしれない、と思いキッチンに下りようとした時のことだった。「ずしん〜」と重い音が階上からした。ちやうど今日はリゼが泊まっているはずの部屋の方からだ。何が起こったんだろう?

リゼの部屋の様子を見に行ったチノの目に入ってきたのは、とても

微笑ましい光景だった。

ココア、千夜、シヤロ、リゼの年上組四人が、同じベッドで好き勝手な寝相をしながら仲良く眠っている。おそらくリゼ以外の三人がリゼの部屋に押しかけて一緒に遊んでいるうちに、そのまま眠ってしまったのだろう。特にココアの寝相は悪く、ベッドから足がはみ出している。寝ているうちに壁を足で蹴ってしまったのがさっきの音の原因なのだろう。

ココアの足がまた壁を蹴りそうになっていたので、チノは呼びかけた。

「ココアさん、そんなに寝相が悪いとみんなの迷惑になりますよ。早く起きてください。それにもうココアさんは起きる時間です。早起きしてパン作りの修行するんじゃないですか？」

「むにやむにや…… お姉ちゃん遊んでくれるの？ わーい……」

ココアからの寝言での返答だったが、チノははっとする。この受け答え、さっきの夢の中のモカとココアの会話にあったのと同じ台詞なのではないだろうか。

（まさかとは思いますが、ココアさんも私と同じ夢を見ているのでしょうか……）

チノは思わずまじまじとココアの寝顔を眺めてしまう。

ベッドで子供のようになすやすや眠る四人の姿は、四人の「ラビットクロニクル」のアバター、そして異世界で見た子供のような種族の姿と不思議とダブる。それに無邪気な寝顔は、まるで小さい姿のマヤ・メグ・ナツメ・エルのお昼寝する時の寝顔のようだ。

この卒業旅行が終わると、チノはココアが木組みの街に来たときと同じ学年になる。いざ自分が高校生になる時になって思うのは、二年前の自分からするとあれほど大人に見えた高校生は（ココアは元からあまりそうは見えなかったが）、思ったほど大人ではないということだ。中学生の時の自分と同じで、遊びたくなったり子供っぽいことをしたい気分になることもあるし、ささいなことで不安になったり悩んだりすることもある。

年上組にとっても、住み慣れた地を離れてこんなに長い間旅行する

のは初めてで不安もあったはずだ。言葉や態度に出しこそしなかつたが、見知らぬ都会で年下の子達を預かっている以上、危ない目にあわせたりする訳にはいかない、というプレッシャーもあっただろう。ちやうど異世界のチノが、ダンジョンで小さくなってしまった四人を引率する時に感じたのと同じような。

(……年上組も、たまには小さい子供に帰って遊びたくなるような気分のこともあるのかもしれませんが)

そう思ったチノは、あえてココアを起こさずにそのまま部屋を出ることにした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

もしもこの場に霊体化した「もう一人のチノ」のような、第三者の目線で物事を見ることができる存在がいたとしたら、こう思っただろう。

「あと五分だけですからね」とココアに言って部屋を去ったチノの姿。

その横顔に浮かぶ、優しさに満ちた微笑みは。

香風サキのそれに似ている、と。